芬陀利華

ふんだりけ

京都女子大学　宗教部

51

ふんだりけ　第51集

京都女子大学　宗教部

目次

非合理的な人間　黒田義道　4
～月例礼拝に寄せて～
学生時代の出会いから得られたもの　橋本彩子
クマとドングリと菩薩道　西　義人
草刈英治少佐のこと　小林瑞穂
ためらう薔薇　清基秀紀
生きている不思議　片山勢津子
「つながり」を考える　中西俊英
以和為貴　齊藤和貴
無常に向きあう　藤井隆道
構造的に考える、好きなことをする　山岡俊樹
私たちの抱える危うさ　普賢保之
障害者職業カウンセラー　倉本義則
おもふがごとく衆生を救う　森田眞円
幹の研究・葉っぱの研究　八田一

シリーズ　ことばの窓　70
①言ってはイケナイ言葉　坂本信道
②人間の姿　宮﨑三世
③「ちょっとした」違い　田上稔
④身にしむや　大谷俊太
⑤「正しい」語義？　池原陽斉

⑥さようなら「ら」？　中島和歌子
⑦人との関係を映す鏡　峯村至津子

シリーズ　智慧の蔵　82

『令和版　仏の教え　阿弥陀さまにおまかせして生きる』　小池秀章
『ガンダーラ美術にみるブッダの生涯』　上野隆平
『聖徳太子―実像と伝説の間―』　赤井智顕
『いつでも歎異抄』　那須公昭
『ブッダとそのダンマ』　壬生泰紀
『ジャータカ物語』　井上博文
『ねぇ、お坊さん教えてよ　死んだらどうなるの？』　野村淳爾

仏典随想　96

『般若心経』　安田章紀
『恵信尼消息』　塚本一真

法のことば　中西俊英……9・19・29・38・39・49・99

澪　標　黒田義道　100

令和三年度　宗教部行事一覧　108
編集後記　109
表紙作画　辻　誠
表紙画の資料提供　安藤佳香

非合理的な人間
～月例礼拝に寄せて～

黒田義道

入学式の価値

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。在学生の皆さんも、それぞれに新年度を迎えられたことと思います。

年度初めには、新入生を迎える、入学式が行われます。これは京都女子大学に限られたことではなく、様々な学校で行われることです。

ごく単純に合理性だけを追求すれば、入学式を行わなくても、授業を始めることは可能です（もちろんガイダンスは必要ですが）。それでもなお、入学式が行われるのはどうしてでしょうか。

それは、私たちはこうした儀礼を通して、気持ちを新たにしたり、区切りをつけたりすることができるからです。「儀礼的」という語は、形式的で非合理的であることを批判する言葉としても用いられます。しかし、たとえば入学式や卒業式の廃止論は力を持ちません。なぜなら儀礼の持つ力を、多くの人が体験的に理解しているからでしょう。

実際、入学式やその後の本願寺参拝を通して、京都女子大学に入学した実感を持った人（あるいは、それらの行事の中止などで、実感を持ちにくかった人）も多いと思います。

月例礼拝

新型コロナウイルス感染症の流行で、昨年以来、私たちの生活には、さまざまな制約が生じています。制約されて初めて、私たちが当たり前だと思ってきたことが実は有り難いことであったことに気づかされました。その中で、制約に対応するための数多くの取り組みが行われ、成果が見られたことも事実です。

京都女子大学における「仏教学」の授業も、昨年はオンラインで実施されました。私の担当したクラスでは、幸いにして対面授業を実施している例年と変わらない成果があったと感じています。受講生のさんの努力に、何よりも感謝しています。

今年度も、「仏教学」の授業は、原則としてオンライン授業（オンデマンド型）となります。ただし、月例礼拝だけは、前期・後期各三回のうち、二回を対面授業で実施することにしました。

どうして月例礼拝に限って対面授業で実施するのでしょうか。一言で言えば、体験することの価値を重視したいからです。

「仏教学」は、京都女子大学の「建学の精神」を学ぶ授業です。「建学の精神」の学びは、単なる知的理解のみを求めるものではありません。月例礼拝は、宗教的空間に身を置き、その儀礼に参加することを通して、「建学の精神」を体験的に学ぶ場であるのです。仏教に限らず、宗教には必ず儀礼が伴います。つまり宗教には必ず体験的側面があると言えます。

知的理解の限界

人間は、合理的思考や知的理解のみで生きることはできません。もし、そうした思考や理解のみで生きることができるのならば、私たち人間は、老い、病気になり、必ず死にゆく存在であるという、法則的事実に悩むことはないはずです。言い換えれば、私たちの望む「幸せ」は、老病死によって損なわれるという現実に悩むはずがありません。変えようのない事実に逆らうことは非合理的です。

ところが、私たちは老病死をはじめとする法則的事実を前に悩みます。仏教ではこのほかにも、様々な法則が示されています。私たちはそうした法則に逆らい、「うまくいかない」と悩むのです。

いくら安全対策が万全だと説明され、頭では理解しても、やっぱり、バンジー・ジャンプ（これも儀礼が娯楽化したものです）を飛ぶことは怖いです（やったことはありませんが）。逆に飛行機がどうして飛ぶのか、理解できなくても、あの金属の塊（最近は違うかもしれませんが）に乗ることは怖いとは思いません。

理屈を知的に理解できても怖いものは怖いですし、理解していなくても、怖くないものもあります。人間は、必ずしも合理的にはできていないのです。

形から入る学び

新しいスポーツや楽器の演奏などに挑戦するとき、基本動作の修得が必須です。同じ動作を繰り返し練習し、身につけます。形から入る学び方だと言えます。なぜ、それが必要なのか、初心者が具体的に説

明することは容易ではありません。よく理解できるようになれば、かなり上達している証拠です。

空手や剣道などには、「型（形）」の競技があります。茶道も所作の形を重視しますが、どうしてそうした形になったのか、お稽古を繰り返す中で理解が進みます。

学校での学びは、確かに知的理解から入ることが多いでしょう。けれども、それ以外の場では、形から入る学びが少なくないことにも気づきます。

月例礼拝もまた、形から入るという方法で、「建学の精神」としての仏教を学ぶ機会だと言えます。

仏教を学ぶ意味

「仏教学」の受講生から、「授業を通して、自分を客観視することができるようになった」とか「自分が狭い視野の中にいたことを知ることができた」というコメントをしばしば受け取ります。

仏教はたいへんよく人間を観察している教えです。人間には老病死に悩むように、知的理解や合理性だけでは割り切れない部分があることも、よく見ています。

既に本学の仏教とは異なる信仰（「無宗教」の方も含めて）を持つ学生さんにとっても、本学の「建学の精神」を学ぶことは、自身の信仰を深く確かめることにつながり、有意義であると思います。

「建学の精神」としての仏教の学びは、単なる知的理解を超え、仏教を鏡として自分という人間を深く見つめ直すことにつながっていま

す。そしてそれが、宗教に対する正しい理解と正しい批判力を身につけることになります。

さらに、仏教の学びは、自己とは異なる多様な考え方に触れること、加えて日本文化に含まれる仏教的要素を学ぶことでもあります。国際化が進む中で、異文化・自文化を理解することにもつながっているのです。

さぁ、新しい学びの体験に進みましょう！

（第三八六号　二〇二一年四月）

法のことば

心如工画師
画種種五陰
一切世界中
無法而不造

（仏馱跋陀羅訳『華厳経』夜摩天宮菩薩説偈品）

巧みな画家が世界を描き出すように、私たちの心は世界中の森羅万象を作り出している。

右記の偈では、心のはたらきによって作り出される限りの「現実」に、私たちは住んでいると述べられています。

私たちが見ている「現実」っていったい何なんでしょう？　脳科学の分野でも、「私たちが見ているのは脳によって自分用に最適化された現実なのだ」（デイヴィッド・イーグルマン『あなたの脳のはなし』、早川書房）という類似した指摘があります。異なる分野でともに導き出されたひじょうに興味深い一つの見解です。

自分自身の「現実」の捉え方には誤りがない、と私たちは無意識的に感じています。自分自身の無謬性を、仏教の考え方は解きほぐしてくれると思います。

（中西俊英）

（第三八六号　二〇二一年四月）

学生時代の出会いから得られたもの

橋本彩子

十数年前の4月、私は本学の入学式に出席していました。その時には、また教員という立場で母校に戻ってくることになるとは夢にも思いませんでした。

私は、大学進学にあたり、漠然と理系分野を考えており、なかなか進路が定まりませんでした。自分自身を振り返って、生きるために必須の「食」に関心を持っていることに気付き、食べたものが体内にどのように吸収されてはたらくのか、なぜ偏った食生活で健康を害するのか、また当時、食育基本法が制定された時期でもあり、子どもの朝食欠食や食環境に関する特集がメディアで取り上げられているのを見て、食や栄養が身体だけでなく心の健康にも影響することに一層興味を持ちました。そして、栄養学を幅広く学ぶことができ、国家資格「管理栄養士」の養成課程を有する歴史ある本学の家政学部食物栄養学科を選びました。

大学では、入学前に抱いた疑問に対する答えを見つけ、そしてまた新たな疑問が生まれ、学びを深めるといった充実した生活を送ることが出来ました。3回生になると自然な流れで就職活動に取り組み、4

回生の卒業研究が本格的に開始する頃、無事に就職先も決まり、卒業研究に専念しました。そこで、卒業研究のテーマとして、今後の自分の人生に多大な影響をあたえる「亜鉛研究」と出会いました。

人に研究内容を聞かれて「亜鉛」というワードを口にすると、「亜鉛って何?」と多くの方に聞き返されます。私自身、卒業研究のテーマで亜鉛を扱わなければ、興味を持つこともなく、授業で学んだ基本的な知識として「亜鉛は、牡蠣に多く含まれるミネラルの一つで、欠乏すると味覚障害や皮膚炎が起こる栄養素」程度の認識しかなかったと思います。

ミネラルは、大きく2種類に大別され、骨の主成分のカルシウムや、食塩の構成成分のナトリウム、野菜に多く含まれるカリウムといった比較的摂取量の多い多量ミネラルと、鉄や亜鉛、銅などの摂取量の少ない微量ミネラルに分類されます。亜鉛は微量ミネラルに含まれ、どちらかと言えば、栄養素の中でもマイナーな存在だと思います。しかし、亜鉛は成人の体内にわずか2g程度しか存在しないにもかかわらず、非常に多岐にわたる機能を担っており、そのため欠乏すると味覚障害や皮膚炎だけでなく脱毛、下痢、成長障害、食欲不振、免疫機能の低下など様々な症状を引き起こします。世界の三大微量栄養素欠乏としては鉄、ビタミンA、ヨウ素が知られていますが、これらに次いで亜鉛の欠乏も問題となっています。さらに、近年は、日本を含め先進国においても高齢者や女性を中心に潜在的な亜鉛欠乏者の存在が知られるようになっています。このような亜鉛栄養の改善を目的としたテーマで、卒業研究を進めていきました。

卒業研究を通して、初めて「研究」というものにふれ、先生方には、答えのない問いに向かっていくことの難しさやその奥深さ、面白さを学ぶ機会をいただきました。そして、もう少し続けたいという気持ちを次第に強く持つようになり、進学という想定外の選択をしました。

大学院生の時には、実際の臨床現場における亜鉛欠乏の現状や苦しまれている患者さんの様子、種々の疾患と亜鉛欠乏との関連について、臨床医の先生方から聞く機会があり、自分が関わっている研究が少しでも何か人の役に立つことができればという気持ちも湧き上がってきました。研究活動中心の生活が充実している一方で、大学院を出てからの自分自身のあり方についてイメージが沸かず悩んだ時期もありましたが、人生の先輩である先生方や企業に就職したＯＢ・ＯＧに話を聞いたり、同期達と話をする中で自分の考えを見つめ直すことが出来たと思います。

院生時代、ある先生に「研究は楽しいが、自分が行っていることは限られた狭い範囲のことであるという意識を持ち、大きな視野をもって取り組まなければならないよ。」という言葉をかけていただいたことがあります。著名な先生が仰ったこの言葉は、とても印象的で、広い視野で物事を見る姿勢は、日々忘れずに心掛けたいと思っていることです。

現在は、亜鉛をはじめミネラルが関わる栄養課題に関心を持ち取り組んでいます。栄養は、摂取する食物や栄養素の体内でのはたらきも大切ですが、「食」をとりまく人の食環境や、食知識、食行動も大きく関わっています。そのため、細胞レベルでの研究や、ヒトを対象とし

た実践的な調査研究を進めることにより、少しでも健康維持・増進に貢献したいと考えています。

学生時代を振り返ると、私にとって、この時に学んだ栄養学や卒業研究での亜鉛との出会い、恩師・友人達との出会いは、人生に大きな影響を与えています。特に、悩んだり苦労している時に親しくなった友人達とは、同じ志を持ち、課題や研究に取り組む中で、進路や進学、就職などについて話をするようになり、そして、それぞれ異なる状況にある現在も、お互いに刺激し合える関係を築けています。

学生の皆さんもこれから、人との出会いや、学問、サークル、趣味など様々な形の出会いがあると思います。その中で、学生時代の今しか出来ないこと、何か没頭して達成感を得られる経験を重ねることは、今後の生きる糧になると思います。是非これからの出会いを大切に、充実した大学生活を送られることを願っています。

（第三八六号　二〇二一年四月）

クマとドングリと菩薩道

西　義人

ドングリ撒き問題

少し季節外れの話になりますが、秋になると京女の図書館のあたりには樹から落ちたドングリが転がっていますね。そのドングリが昨年の秋、東日本の一部地域で凶作となりました。それだけが原因とは断言できないものの、それらの地域では、山のドングリを秋の主要な食物とするクマ（ツキノワグマ）が人の生活圏へ頻繁に出没しました。その件数は過去五年で最多となり人身事故が続発、重傷を負った方や亡くなった方が出ました。そして、クマもまた多数捕殺されました。

そんな中、あるボランティア活動が話題になります。それは各地から集めたドングリをクマの餌として山奥に撒き、クマを山奥に留めて捕殺から守ろうという活動でした。

実は、この活動は以前から行われていました。なおかつ、現場の専門家や研究者などから否定的見解が出されてもいました。研究者を中心に組織されているＮＧＯ「日本クマネットワーク」のサイトではその論点がまとめられています。一例を挙げると、他所から持ち込まれたドングリが地域固有の遺伝子に影響を与える、あるいは害虫や病気

などが一緒に持ち込まれる可能性があること。また、ドングリの豊凶は樹の元々の特性であって、ドングリを餌とする生物が凶作のために減少することは、樹の繁殖にはむしろ有益な可能性もあることなどです。

そして、クマに限らず野生動物への餌やりは慎むべきという基本原則も挙げられています。それは、野生動物の行動を変化させて人との距離を望ましくない形で縮める可能性があるからです。出町柳のトンビや六甲のイノシシなど、身近にも例がありますね。

クマの場合は、人から餌を与えられたり人の生活圏で生ゴミを食べたりしたことで、食物に執着して人を恐れなくなり、人を襲った、あるいは捕殺された、という事例があります。現場の専門家は、人もクマも傷つけたくないという思いから餌やりストップを強く訴えています。また現在、国立公園での餌やりに罰金が科せられる法改正も進んでいます。

特例として、絶滅の危機にあるシマフクロウなどへは環境省による慎重な調査・管理のもと給餌が行われています。逆に言うと、それだけ継続的に責任を負うことのできる機関でなければ給餌を行うべきではないということにもなるわけです。

菩薩の餌やり

ですが「腹ぺこの動物にごはんを与えるのは善いこと」といった素朴なイメージは、恐らく多くの人が持っていることでしょう。前述のドングリ撒きに対しても、直感的に好印象を持った人はいるかと思い

ます。誰だって腹ぺこは嫌ですから当然といえば当然です。「善いこと」であればこそ放っておけばやってしまう人が出るし、善意の行動を批判すれば感情的な反発や態度の硬化を招くこともある。餌やり問題が難しいのはこの点にあります。

これについては仏教の責任も多々あるかもしれません。なぜなら、仏教では善行としての餌やりをかなり強力に説いてきたからです。その代表例が、特に大乗仏教で重視されてきたジャータカです。ジャータカは、菩薩（ブッダと成る前の釈尊）が前世で限りない生まれ変わりを繰り返しながら善行を積み重ねてきたことを伝える物語です。

ジャータカで、菩薩はしばしば自己犠牲を伴う布施の行を行っています。たとえば捨身飼虎（しゃしんしこ）と呼ばれる有名な話があります。菩薩がある国の太子だったとき、餓えた虎の親子を救うため己の身を投げて与えたというものです。法隆寺の玉虫厨子にもこの場面が描かれています。

仏教ではこれが尊い菩薩道として説かれるわけですが、今日の環境保護の常識からすれば、人を食べることを動物に学習させるなど、人の命を守るためにはもちろん、その動物の命を守るためにも絶対にしてはいけないことです。

ならば仏教でもそんな話はもはや封印すべきなのかといえば、そうは思いません。現実の餌やりに問題があることは、補足説明をすれば良いことでしょう。

菩薩道の本質は、自己犠牲や餌やりといった行為そのものではなく、その行為が自己中心的な執着を完全に離れてなされるという点にあります。菩薩は、たとえ他者のために自分の身命を投げ出す時ですら

「私は善いことをしてあげた」という心は起こしません。そこが尊いのです。菩薩道の本質にある精神を伝えることは、むしろ餌やりという「善いこと」に執着しない柔軟な視点を提示することにもつながるのではないか、というのは期待しすぎでしょうか。

一生ものの課題

奈良の興福寺では毎年、不殺生の教えに基づき猿沢池に魚を放す放生会が行われています。従来はコイやキンギョが放されていたのですが、近年、それらは池にとって外来種なので生態系の破壊につながるという批判が寄せられていました。そこで興福寺は近畿大学農学部の協力のもと、事前に捕獲しておいた在来種の魚を放流するという方法を昨年から新たに始めました。

「伝統行事なんだから口を出すな」でもなく、「魚を大切にするならいっそ全部やめよう」でもなく、科学的な知見を受け入れつつ仏教精神を伝える行事を存続していくにはどうするか。極論ではない現実的な方法を探る姿勢に、見習うべきことがあるように思います。

興福寺ではその中でさらに、不殺生といいながら外来種を人間の都合で選別駆除していいのかという課題にも向き合うことになったといいます。

クマ対策も同じでしょう。どんな方法であれ、他の命を脅かさない完璧にきれいな方法などはありません。多くの当事者はその事実に向き合いながら、より良き道を探っているはずです。

本学の建学の精神・教育理念には「あらゆるいのちあるものの平等

を自覚する」とあります。私はこれを読むたびに、理念にふさわしい行動ができていない自分を思い知らされます。その事実に向き合い、なおかつどうせ無理だと極論に逃げることなく、より良き道を柔軟に探るという、菩薩を仰ぐ者にとって一生ものの課題が、ここには込められているように思うのです。

（第三八七号　二〇二一年五月）

ばことの法

命根者何。
頌曰：「命根体即寿 能持煖及識」。
（世親造・玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』分別根品）

命根とは何か。頌に（次のように）ある。「命根の本質は寿命に他ならない。体温と識とを保持するものである」と。

仏教における基礎学である『阿毘達磨倶舎論』の「いのち」の定義です。命根（生命機能）は体温と識（外界からの様々な刺激に対する反応）があること。感情や善悪の心は識に付随して生じるため、その条件とはなりません。

「いのち」とはいったい何なのでしょう。目にはみえないし、手で触れることもできない、失われたことだけ分かるものです。ただ、一人一人に分け隔てなく与えられているものでもあります。

仏教では右記のような教理的な定義もあれば、「必ず救われてゆくいのち」という物語もあります。人間である限り向きあわざるを得ない問題に、仏教の叡智は示唆を与えてくれると思います。

（中西俊英）

（第三八七号　二〇二一年五月）

草刈英治少佐のこと

小林瑞穂

『芬陀利華』の原稿依頼を受けて、何について書こうかと考えた時、真っ先に頭に浮かんだのは「草刈英治」のことであった。草刈英治は日本海軍の軍人である。研究の関係で調べてからというもの、折に触れて草刈のことを思い出して考えるようになった。今回もまた草刈を思い出したのである。断っておかねばならないが、いわゆる「歴史上の好きな人物」というわけでも、彼の生き方に共感しているというわけでもない。（この時点で『芬陀利華』の原稿依頼で求められた内容から離れている。ご容赦いただきたい。）

私がいつも考えることは、草刈の「苦悩」である。

草刈英治という人物の詳細を知ったのは、大学院の博士前期課程在学中に出会った『嗚呼草刈少佐』という文献による。私は海軍大臣隷属機関の「水路部」について研究しているが、一九二九年にモナコで開催された臨時国際水路会議に、水路部長の米村末喜海軍少将と共に派遣されたのが海軍軍令部参謀の草刈英治少佐であった。草刈について詳しく調べたいと思って辿り着いたのが『嗚呼草刈少佐』であった。

なぜ、『嗚呼草刈少佐』という文献が存在するのか。草刈英治は国際

会議出席の翌年、一九三〇年五月二〇日に東海道線上りの寝台列車で割腹自殺を図り亡くなった。ロンドン海軍軍縮条約をめぐって紛糾していた時期であり、海軍軍令部参謀の立場にあった軍人の死は衝撃を与えた。山下源太郎海軍大将および海軍軍令部長・加藤寛治による序文、海軍関係者による追悼文や回想を収録して出版された『嗚呼草刈少佐』は、海軍軍縮条約締結および政府の統帥権干犯に憤慨し、抗議のために自刃した草刈英治少佐というイメージを形成し、喧伝した。「楠木正成」「和気清麻呂」「高山彦九郎」「軍神」。『嗚呼草刈少佐』では草刈を「忠君愛国」の歴史上の人物になぞらえて讃え、神格化する表現が多い。

先行研究において、『嗚呼草刈少佐』を出版した政教社や軍縮条約反対派が、草刈英治の死を反軍縮キャンペーンに利用したことはすでに指摘されている。また、これまで草刈の死の真相についても様々に考察されてきた。ロンドン海軍軍縮会議の全権を務めた海軍大臣の財部彪も同じ寝台列車に乗車していたことから、草刈が財部海相を暗殺しようとして失敗したとする説もある。

実際の草刈の死は不可解である。背広姿で京都駅から東京行き寝台急行に乗車した草刈は、東京駅まで乗車する旨を乗務員に告げると、そのまま寝台に入った。富士駅を通過した頃、給仕の係員が寝台の異変に気付く。寝台のカーテンを開けると、そこには「海軍制帽をかぶりパジャマを着た妙な格好」（車掌の証言）で、海軍の短剣で自刃を図った草刈がいた。草刈は意識があり、受け答えができる状態だった。車掌が短剣を取り上げようとすると「この剣をとられては俺の死が無

意味になる、判らなくなる」と騒ぎ、車掌が「どなたですか？」と名前を尋ねても答えようとしなかった。草刈は搬送先の沼津の病院で死亡した。日ごろから仏教思想に触れ、禅に傾倒していた草刈は、乗車前に京都・妙心寺の西山宗徹を訪ねたことになっていたが、実際は面会していなかった。事件後に宗徹は「草刈少佐という人はちっとも知らない」と答えたという。

草刈の行為が、軍縮反対派の主張するように「海軍軍縮条約と統帥権干犯に憤慨した末の死」であったならば、「寡黙」「真面目」と評された草刈の性格上、場所と服装、遺書なども注意を払って準備するのでは？と疑問が残る。寝台列車の様子からは、何事かに悩んで思いつめ、突発的に自刃に及んだ可能性が考えられないだろうか。実際、事件直後はそのように見る向きもあった。

草刈は日本海軍のフランス通を目指してフランス語の勉強に励み、エリートコースである海軍軍令部参謀に任じられて張り切り、国際会議出席も欧州視察も意欲的にこなした。その一年後の死は、あまりにも落差が激しい。一体草刈に何があったのだろう。

これは推測の域を出ない私見であるが、当時の海軍軍令部そのものが草刈を失望させた一因だったのではと考えることがある。海軍軍令部が軍縮反対を強硬に主張することで、海軍内部の分裂と対立を生んだ。常に理想の海軍軍人としての在り方を考え、仏教思想に触れてストイックに自己の精神と向き合っていた草刈は、海軍内部の激しい対立に直面して自身の理想と解離した現実に悩んだのではないだろうか。

草刈の上司であり、軍縮反対派の首領であった加藤寛治は、日記に

草刈の死を短く記した。後に加藤は『嗚呼草刈少佐』で序文を記したが、実際のところは事件が起きたことで草刈の存在を認知したのであり、人に語れるほど草刈のことを知らなかった様子が窺える。上司であった加藤が序文を記すことは当然と言えるが、よく知らない部下の死を政治的主張に利用するところに非情を感じる。このような海軍軍令部の姿に、草刈の苦悩の一端が垣間見えるように思うのである。

遺された人々は、自分たちの求める草刈英治を作り上げた。海軍軍縮条約に反対するための象徴として、または不可解な草刈の死を「意味あるもの」として受け入れるために。死後の「草刈英治少佐」について、本人は草葉の陰でどのように思っているのだろう。私は時折、このようなことを考えている。

（第三八七号　二〇二一年五月）

ためらう薔薇

清基秀紀

バラが開く

大学生の頃、第二外国語として学んでいたフランス語の課題に、詩の訳があった。

そのなかで、どうしてもうまく訳せない一文があった。今となっては元のフランス語は覚えていないが、英語で言えばRoses are half open そのまま訳せば「バラは半分開く」だが、どうも詩的ではない。

悩んだ末に「バラはためらい開く」と訳したが、少し暖かくなって、逡巡(しゅんじゅん)しながらゆっくりと花を開かせるバラを思い、自分でも気に入った訳となった。

逡　巡

人は確固たる自信がないときに躊躇(ちゅうちょ)をする。本当にこの選択でいいのだろうか、私にそれが出来る力があるのだろうかと考えるのである。

それは自分自身の弱さを認めているからである。自分自身の弱さを認めず、自信たっぷりに進む強い人を見ると、少しはうらやましくもあるが、自分にはとても出来ないと思う。本当は、自分の決断にそれ

ほどゆるぎない自信をもてるほど、人は強くはない。

しかし時に人は、その自分の弱さをかくすために、誰かの強い決断に共感する。本当はそうではないかもしれないが、そう思い込むほうが楽なのだ。自分も強いものの立場におくことができるのである。

強者への共感

アメリカの大統領選を見ていると、負けを認めずに強がる候補者に、いさぎよく負けを認める勇気はないのだろうかと不思議に思うが、もっと不思議なことは、強引な強がりに共感するアメリカ人の多さである。

自信や強さに共感することで、自らの弱さを覆い隠しているように見えてくる。自分自身をきちんと見つめることなく、他人の強さに無批判に共感することの危うさには、なかなか気付くことはできないようである。

コロナ時代の問題

昨年は新型コロナウィルスの感染拡大の影響を受けて、大学も大変な一年を過ごした。その影響はまだ解消されてはおらず、今年度も不自由な大学生活を強いられることになりそうだ。

ウィルスの感染は確かに恐ろしいが、それ以上に恐ろしいのは、どうやら人間のようである。

感染者に対する非難や差別は想像を絶するものがある。医療従事者に対する偏見も報告されている。うわさ話を信じ込んで誹謗中傷に加

わる人の話を聞くと、人はどうしてあんなに残酷になれるのだろうかと思う。

自粛が不十分な他者への批判も度が過ぎている。いびつな正義感は自粛警察と呼ばれるが、その正義感に酔いしれている人は、そこにある問題点にはなかなか気付けない。

その論理に潜むのは因果論である。コロナに感染した人は、その人に原因があって、きっと何か悪いことをしたからに違いない、感染拡大が収まらないのは自粛が充分でない人や店の責任だと批判を強める。

人類が、かつてない程の困難に直面した今こそ、一人ひとりの人間性が問われることになるが、どうやらその負の面が表面化したようである。

自分自身を善の側において他者をさばく。テレビのワイドショーでは、毎日そのようなコメントが繰り返され、それを見る多くのものが共感する。他者を批判することによって、自らを善だと思い込む、その姿勢に欠けているのは、自らを見つめる目である。

仏の眼

仏像の眼は完全に開かれることなく半分閉じられている。それは半眼（はんがん）とよばれるが、半分は外の世界を、半分は自分自身の心を見つめていると説明される。

私たちは、自分自身のありのままの姿をみつめてはいない。私のことは、私が一番知っているなどと思うことが、そもそもの間違いである。

私という人間はどのような人間か、他人の意見を聞いてみると意外なほど、自分の思う自分とは異なっていることに驚く。しかし、よく考えて見ると、確かに自分でも気付かなかった面があることを知らされる。

釈尊のさとり

釈尊のさとりは、世の中の人びとのありさまをながめて、そこにある問題点を見つめ、その解決策を見つけたのではない。

釈尊は自分自身を見つめた。生老病死といった根本的な苦は、誰かの苦ではなく、自分自身のなかに存在する苦であった。それを解決する道を命がけで見つけたのが、釈尊のさとりである。

他人の苦に共感して癒やしを与えるのではなく、何よりも自分自身の苦と向き合い、それをごまかすことなく根本的な解決を求めたのである。

親鸞の自覚

親鸞も自分自身を深く見つめた。

比叡山でさとりに向かう仏道を二十年間歩んだ青春時代は、目標に向かって自分自身を信じ、真面目に修行の日々を送る充実した日々のはずだった。

しかし、前を向いて進むだけでなく、自分自身をしっかりと見つめると、違う自分が見えてきた。

さとりに向かう善の道を歩んでいるはずの自分自身は、本当に心か

ら善なる存在、善人なのだろうか。煩悩をなくすために厳しい修行を続ける自分自身の心は、本当に清らかになったのだろうか。

親鸞は悩んだ。このような自分は本当にさとりへの道を歩んでいるのだろうか。

親鸞は自らを煩悩に充ちた存在であると自覚した。そして、人間というのはそのような存在だからこそ私が救いたいと願ってくれた仏がいる事を知った。それが阿弥陀仏であり、その願いが本願なのである。

親鸞は、まさにその願いこそが、自分のための願いだと考えた。自分をみつめる眼をもたなければ、決して見えない願いであった。

ためらう薔薇

ためらう薔薇は美しい。自信たっぷりに堂々と咲き誇る薔薇も美しいが、陽ざしの明るさに開きかけたものの、自信がもてずに逡巡する、その弱さも、私にとっては美しいのである。

（第三八八号　二〇二一年六月）

法のことば

時有僧出問、「如何是無位真人？」(A)
師下禅牀、
把住云、「道道」。
其僧擬議。
師托開云、「無位真人是什麼乾屎橛」(B)、
便帰方丈。

（『臨済録』）

禅の問答では、「如何なるか是れ無位真人」（傍線(A)）や「如何なるか是れ祖師西来意」という形式で、修行者自身が体得したさとりの本質を問います。右記で臨済義玄は「乾屎橛」（傍線(B)）すなわち「乾いた棒状の糞」と答えています。そして相手を突き放して、その場から去ってゆきます。

なぜ「乾屎橛」という表現を採ったのか。それは希求すべき対象としてのさとりを絶対化してはいけないことを教えるためで、いわば反措定的な表現です。

用意された答えだと永遠に外在的な知識となり、修行者は二度とそれを活きた事実として自分自身の上に気づくことができません。

大学での学びも同じではないでしょうか。答えが用意されていない問題にとりくみ、自分自身で見つけ出してこそ自分の血肉となってゆくと強く思います。

（中西俊英）

（第三八八号　二〇二一年六月）

生きている不思議

片山　勢津子

本学に着任したのは平成五年四月一日。辞令を貰ってすぐに一泊二日の新人研修に出た。建学の精神を学び西本願寺にお参りするというものだが、全く宗教と関わりなく過ごしてきた私にとって、それは大変なカルチャーショックで、夜は一睡もできず高熱を出した。何しろ、お墓参りの習慣もなく、仏壇もなく、宗教的な行事が一切ない中で育ったのだから仕方ない。でも、これがきっかけとなって、母の家が浄土真宗門徒だったと知り、自分のルーツを少しずつ探っていくこととなった。

以前、ルーツの一部を書いたが、それから色々気付くことがあったので、この機会に追記したい。

感染症

昨年来、新型コロナ感染症の拡大で、世の中は一変した。去年の三月、これから一体どうなっていくのだろうと不安に駆られて、パンデミックを描いたアルベート・カミュの『ペスト』を読み始めた。そしてスペイン風邪で、父方の曽祖父が急死したと、母から聞いた。残さ

れた祖母や曽祖母ら女達に泣きつかれたのだろうか、祖父は故郷に帰ることなく、逗留していたその家の婿養子となった。

祖父は、故郷である鹿児島の産業育成のために彫刻技術を学ぶように県費で東京の学校へ派遣された青年だった。それがどうして技術指導のために知り合ったというだけで、使命を違えて祖母の家の養子になったのか。ずっと気になっていた訳が、漸くわかった。

彼の生まれは、母と同じく東シナ海に浮かぶ甑島である。ドラマになった『ドクターコトー診療所』が現存するので少し知られてきたものの依然ひっそりした離島である。

隠れ念仏

江戸時代、薩摩藩では浄土真宗は禁教だったが、島のほとんどが隠れ念仏だったという。そのため、度々弾圧があり島唯一の商家だった祖父の先祖の夫婦が浜に縛られ、夫が命を落とした。男の方は逆さ吊りだったというので、溺死である。何と酷い！　これを知った時は言葉を失い、見せしめにされた理由をただしたかった。

祖父の家は十六世紀中頃、中国福建省から渡ってきた「江夏」族を祖とするようだ。一族は島津に仕えて各地に散り、大陸との貿易を行なった。だから、密貿易のおかげで暮らしているのに藩に背いたことから処刑された訳だ。因みに、阪神の名投手だった同じ姓の江夏豊も鹿児島がルーツなので、昔は同じ家業だったと思う。

祖父は時々、不思議な印を組んで瞑想していて、子供心に不審だった。今思えば、宗教弾圧された過去故に、祈りを自らの心に封印して

いたのだろう。養子だから祖母の家の墓地や仏壇があっても良さそうだが、何故か祖母も話したがらなかった。その家は、紀州藩の儒学者がルーツだというので、食い扶持を求めて、家を捨てたのだろう。苗字も変えている。

隠れキリシタン

一方、母方の先祖が甑島に渡ったのは、十七世紀初めである。初代と二代目が「禅師」と記されているので布教のために渡ったと想定できる。母の家は熱心な信者である。生家には、集会所として使われていたと思しき土蔵造りの建物があった。若い頃、図書館収蔵庫で見つけた日本建築学会論文集に「不思議な建物」と紹介されていたのを、偶然読んだことがある。

母が島で過ごした家は、何時かの大きな台風でとうとう屋根が飛んでしまい、今は小さな社しか残っていない。伯父が整理したところ、鳥居のあるこの社から三つの石を見つけた。その一つに「主」と刻まれていることから、元は隠れキリシタンだったようだ。伯父はキリシタンの証しを、幼い頃に見たようなのだが、父親、つまり私の祖父が早逝したため、よくわからずにいたらしい。甑島は天草に近い。

何時だったか、ゼミ生から浄土真宗とキリスト教との類似性を教えてもらったことがある。仏教学の授業で、遠藤周作の『沈黙』を読む課題が出たという。すぐに私もこの本を読み始めたのだが、隠れキリシタンだった先祖の苦難を思うと、涙が止まらなかった。その後、映画になった『沈黙―サイレンス―』も見たが、こちらはむしろ冷静に

鑑賞できた。弾圧の様子や、転びキリシタンの心の変化を見ながら、先祖の逃避行を思った。

伯父も三つの石を見つけて以来、家のルーツを探った。子供の時に、四度の戦に負けて島に流れてきたと、囁された記憶があるらしい。彼の推理では、キリシタン大名だった土佐一条氏の元で戦に敗れ、九州のキリシタン大名を頼って甑島に辿り着いた、ということだ。伯父は石を納めるために、自分の庭に石造の祠を造った。

生きている不思議

宗教は、安らぎや救いを求め、生きるための道標としてあると思っていた。だが、本学に来たことを契機に宗教に触れたことは、私にとってはルーツを探り、苦難を超えて時代を生きてきた人々に想いを馳せることとなった。幼い頃から、寝る前に無事に一日を過ごせたことを感謝して祈るよう、母に躾けられた。祈りの対象は、神様でも仏様でも良いけれども、御先祖様に感謝しなさいと言われていたように思う。祈りを通じて過去を遡れば、生きていることの不思議を想わずにはいられない。

（第三八八号　二〇二一年六月）

「つながり」を考える

中西俊英

本年四月より文学部国文学科に着任しました中西俊英です。専門は仏教学です。東アジア地域の仏教、とりわけ『華厳経』という大乗経典とその解釈史を中心に研究しております。

前期はコロナウィルス感染拡大の影響で学生の方々と顔を合わせることがほとんどなく、パソコン相手に会話をしているかの状態でした。メリット・デメリット両方ありますが、対面でのコミュニケーションの有用性や、日常の何気ない雑談のありがたさを思い知らされました。また、パンデミックという非常時のなかで起こった大学有志教職員の方々による「助け合い藤の会」をはじめ、世界各地で自然発生した利他的な行動は、今後の希望だと感じています。

図らずも、コロナウィルスによって、「人と人とのつながり」をより意識するようになりました。人と人とが世代を越えてつながり合う媒介としての、共有可能なストーリーや価値というものが、次々と解体されつつあります。それは互いの差異を認め合って尊重する方向を目指してきた当然の帰結でもありますが、同時に、「人と人とのつながり」について、様々な角度から再点検すべきではないでしょうか。

「智慧」と「慈悲」

「犀の角のようにただ独り歩め」（中村元訳『ブッダのことば』、岩波文庫、一七―二二頁）という有名な釈尊のことばがあります。出家して仏教を実践する人びとは、瞑想という方法をとおして涅槃という境地を目指します。戒律を守ること（「戒」）、瞑想の実践（「定」）、それによってものの見方が変わること（「慧」）、「三学」としてまとめられるこれらは、自分自身による実践とその結果としての智慧の獲得です。「犀の角」や「ただ独り」という表現が端的に示すように、他者との関わりは特別必要とはされていません。

一方で、「梵天勧請」というエピソードも伝えられています。さとりの内実を説くことを躊躇していた釈尊のもとにインドの神さまである梵天が現れ、衆生に教えを説くことをお願いし、最終的に受け入れられた、という内容です。梵天のはたらきかけにより、釈尊は「生きとし生ける者へのあわれみによって、さとった人の眼によって世の中を観察され」（中村元訳『ブッダ 悪魔との対話』岩波文庫、八六頁）、説法を決意したと伝えられます。これが仏教のはじまりです。ここには他者が存在し、他者にたいする慈悲が仏教を生み出したとも考えられます。

釈尊から確認される「智慧」と「慈悲」、これらは仏教の両輪です。釈尊にあっては半ば矛盾しつつも併存していた両者にたいする考察が深められる中で、他者と関わる「慈悲」のあり方は、「慈」「悲」「喜」「捨」という「四無量心」（無量の衆生を対象に、無量に広げられる四種の心）として説明されてゆきます。

衆生に楽を与えようと願う心（「慈」）、衆生の苦を抜きたいと願う心（「悲」）、衆生の喜びをともに喜ぶ心（「喜」）、これらは一般にイメージされるような慈悲の意味とも重なります。しかし、「捨」は、「自身の心の動きを観察して、それに左右されない平静さ」を意味します。自身の行為がどのような結果を及ぼすかは分かりません。良かれと思って行った行為であったとしても、良くない結果を引き起こすことが多々あります。他者と関わらざるを得ない「慈悲」という行為の難しさは、「智慧」とセットになっているからこそ浮かび上がってくる。仏教における「慈悲」は、たんなる「優しさ」ではありません。

『「利他」とは何か』

「人と人とのつながり」を考える中で、興味深い本を最近読みました。東京工業大学の未来の人類研究センターによる『「利他」とは何か』（集英社新書、二〇二一年）という共著です。伊藤亜紗氏が担当された第一章「『うつわ』的利他 ―ケアの現場から」では、効果的利他主義およびそれと関連した数値化が、トピックの一つに取り上げられています。利他的な行動が共感に支配されないようにすること、共感よりも理性にもとづいて利他を行うことが重要で、そのために効果的利他主義では徹底した数値化がおこなわれます。背景には、環境問題をはじめとしたグローバルな問題と、それに追いつけない人間の想像力の限界があるとも紹介されています。問題解決のための数値化によるメリット、共感よりも理性という姿勢と上述の「捨」との関連など、様々なことを考えさせられました。

ただ、最も共感し、喫緊の問題と感じたのは、同章における「数値化という価値観」への批判、具体的には、数値化によって利他の感情が消える、という指摘です。一例を紹介すると、子どものお迎えの遅刻を減らすために託児所が罰金制を導入した結果、遅刻する親が増えたそうです。親たちのあいだで「託児所を思って時間どおりにお迎えに行こう」と考える利他的な感情が消えたのです。罰金さえ払えば自分たちの都合のいいように行動していいんだ、と考えたわけです。数字による管理によって、倫理的・感情的なつながりが失われてしまう。「数字の活用の仕方を誤ると、数字が目的化し、人がそれに縛られてしまう」という指摘はきわめて重要でしょう。

縁起の当事者

数字にしろデータにしろ、それを扱うのは人間だという点をゆるがせにしてはいけません。パンデミックで「人と人とのつながり」が希薄化する中、目の前のたくさんの情報にたいして、強いストレスを抱えて処理せざるを得ないのが現状です。このような状況だからこそ、「人と人とのつながり」、さらにはその中の当事者である自分自身について、立ち止まって考える必要があると思います。

「慈悲」の側面をとりわけ重視した大乗仏教においては、見えている世界は見えない世界によって支えられて成立している、という相互連関的な縁起の認識モデルが説かれます。私の専門である『華厳経』が最たる経典で、自分自身を見つめる瞑想の中で到達した認識です。自身の行為は時間と空間を超えて見えないところにまで影響を及ぼして

ゆく。縁起的連関の中にある当事者として自分自身を見つめ、問い直し、変わってゆくことこそが、人間の持つエネルギーを他者や環境の方向へと転換することにつながるのではないでしょうか。

（第三八九号　二〇二一年九月）

聞此法歓喜
信心無疑者
速成無上道
与諸如来等
ばこの法と

（仏駄跋陀羅訳『華厳経』入法界品）

仏駄跋陀羅訳『華厳経』の全体の四分の一以上を占める「入法界品」は、善財童子が様々な善知識を歴訪し、彼／彼女たちから特色のある法を教示されるという構成です。最後は、文殊菩薩によって信心の重要性が示され、普賢菩薩によって三昧の境地へと悟入せられ、右記の偈で結ばれます。この偈は、仏道における「信」の位置づけを端的に示すもので、ここでの「信」は「納得する」「信頼する」の意です。

親鸞聖人は『教行信証』信巻でこの偈を引用され、「この法を聞きて信心を歓喜して、疑なきものは、すみやかに無上道を成らん。もろもろの如来と等し」（『浄土真宗聖典 註釈版』、本願寺出版社、二三七頁）と解釈されます。比較すると、自らが信じるというあり方から、（与えられた）信心をよろこぶというあり方への転換が確認されます。浄土真宗における「信」の特徴を、端的に見てとることができると思います。

（中西俊英）

（第三八九号　二〇二一年九月）

法のことば

救世観音大菩薩
聖徳皇と示現して
多々のごとくすてずして
阿摩のごとくにそひたまふ

（『正像末和讃』聖徳奉讃）

救世観音は、聖徳太子としてこの世にそのお姿を現され、まるで父や母がわが子を思うように、見捨てることなくいつも付き添っていてくださる。（『浄土真宗聖典 現代語版 三帖和讃』、本願寺出版社、一七七頁）

親鸞聖人は太子を「和国の教主」とも表現されます。それこそ、日本の釈尊のような存在であり、仏教の新しい動きが登場するたび、太子はその先駆とされました。平安時代に浄土信仰が盛んになると、太子は人びとを極楽へ導く観音菩薩の化身ともされたのです。

この和讃では、阿弥陀仏の救いを助ける存在（観音菩薩）は、聖徳太子として現れ、父母のように私たちに寄り添ってくださる、と説かれます。時代や空間を超えたイメージの重なり合いを見て取ることができるとともに、自分を支えてくれる方々へ、思いをはせてみましょう。

（中西俊英）

（第三九〇号　二〇二一年十月）

以和為貴

齊藤和貴

本学に着任して早くも三ヶ月が過ぎようとしている。三月まで東京の小学校の教師として六年生を担任し、卒業式を終えてから慌ただしく教室の片付け・掃除と自宅の荷物の整理・引っ越しの準備に取りかかった。

振り返ってみると一年前の四月、コロナ禍の中、私が担任した子ども達は六年生であった。前年度、一年生を担任していた私にとって、予想外の担任配置に十分な心の準備はできていなかった。二年生の担任になるだろうと疑うことのなかった子ども達である。担任発表の時に、「え～っ！」という叫び声が聞こえてきた。そして、六年生も驚きの表情であった。担任が変わるとは思っていなかったのである。なにせ、私の研究教科は生活科であり、子ども達は生活科のない六年生の担任になるなんて思ってもいなかったからである。しかし、始業式の後、教室で慌ただしく顔合わせをすると、すぐに子ども達は下校。そして翌日からおよそ二ヶ月の休校措置が始まった。

昨年は異例続きの一年間であった。夏の水泳学習、宿泊生活、運動会……、子ども達が楽しみにしていたことがことごとくできなかった。

小学校生活最後の一年間であり、最上級生として活躍することを通して、大きく成長するはずだった。そんな中、我慢すること、耐えることを強いられた子ども達であった。進学の悩みもあり、難しい時期の子ども達であった。そして、実際に何度となく子ども達の間に軋轢や葛藤も生まれたが、最後には笑顔で卒業していった。そんな子ども達と向き合うときに、私が一番大切にしていたこと、そして子ども達に伝えたかったこと、それは「仲間を大切にすること、違いを認め合うこと、そして対話を通して互いに成長すること」であった。

だからといって、子ども達に直接的に訴えるということはしなかった。ことばで伝えれば理解され、子ども達が実践できるというものでもない。さりげなく教室環境を構成することや、毎日の授業を通して体現するだけである。もちろん、社会科や道徳など、授業が関連することもある。例えば、以下の社会科の歴史学習での一コマであり、直接私自身のことばで「仲間を大切にすること」を子ども達に問うた場面である。

飛鳥時代の聖徳太子（厩戸皇子）を扱ったときである。太子は仏教を取り入れた政治を行い、法隆寺や四天王寺などの建立し、仏法の興隆に努めた。「冠位十二階」や「十七条の憲法」を制定した。外交面でも小野妹子を隋に派遣し、大陸の文化や政治制度を積極的に取り入れ、国内の中央集権体制の整備に努めた。『三経義疏』を著したともされている。思い起こすと、子どもの時の一万円札や五千円札の肖像は聖徳太子であった。

そんな太子と私との接点が名前なのである。私の「和貴」という名

前は、「和を以て貴しと為す」という「十七条の憲法」の第一条に由来するのである。子ども達からすると、「へ～、そうなんだ」という程度のものかも知れない。しかし、太子の業績を歴史的な眼、社会科的な眼で捉え直すと、子ども達の意識も変わってくる。授業の中で、「十七の条文の中で、みんなが一番大事にしたいものを一つ選ぶとしたら？」と問うと、三十五人のうち実に二十人が第一条を選んだのである。第十七条が三人、第五条、第六条、第七条が各二人である。過半数であるとともに圧倒的な差であった。選んだ理由も、「平和主義、平等、団結」といった現代においても通用する価値を表現しているからであった。この年から、小学校六年生の社会科は歴史学習の前に憲法や政治の学習を行うことになったので、日本国憲法との対比が子ども達の中にあったのである。日本人が千年以上も前から「和を以て貴しと為す」こと、仲間と仲良くし大切にすることを生き方、振る舞い方の柱にしようとしていたことが分かる。それでは今の自分たちの学級、そして自分たちの生活がどうであるのか、太子が求める姿を体現することができているのか。子ども達の学習と生活が結びつく瞬間があった。

私自身は、太子の教えを名前にもつことは、プレッシャーに感じることもあった。その反面、誇りに思うところでもある。「和を以て貴しと為す」が太子に由来することは中学生の時に知ったのであるが、この太子の教えも、さらに遡れば孔子の『論語』に端を発するということを、授業のための教材研究をする中で知った。

そんな私が、この春、京都女子大学に赴任した。親鸞聖人の教えを根本に置いていることは承知していた。その親鸞聖人が、太子の夢の

お告げによって法然上人の元へ赴き、自らの進むべき道を悟ったということを知った。そして、「ここでも太子が我が身の近くにいるのか」と思いながら四月一日の新任式を迎えた。真新しい研究室には、書架と机と椅子があった。これから始まる新たな研究生活と学生を相手にした教育活動が、どのように展開するのか楽しみである。いずれ六角堂にも参詣してみようと思う。

（第三八九号　二〇二一年九月）

無常に向きあう

藤井隆道

さる令和三年三月十五日、本学の卒業式が執り行われた。毎年恒例の行事が、今回ひときわ感慨深く思われたのは、コロナ禍で先が見通せないなか、関係者の尽力により、卒業生に会ってお祝いの言葉を述べることが無事できたからであろう。一年前には卒業式が中止になり、卒業生たちに一目会うことすらかなわなかったのである。

別れといっても、卒業といった機会ならば、寂しさもあるがそれ以上の嬉しさもある。しかし別れは時として痛切な経験である。特に死による別離は、親しい人とのあいだに実際に起こったとき、あるいは自身にこれから起こる事柄として予期するとき、あまりに大きな悲嘆や苦悩、不安をもたらす。そしていまコロナ禍によって、私たちは以前にもまして、病や死、別離といった苦を日常のなかで意識し、「無常」に向きあうことになった。

＊　＊　＊

「無常」は仏教の根幹的な教えである。私たちをとりまくあらゆる事象は、自身のこの心身も含めて、一定不変ではなく、留まることなく変異してゆき、やがて滅する。他者とのあいだに形作られたつながり

もそうである。出会いがあれば必ず別れがある。

この無常という現実にどのように向きあえばよいのだろうか。仏教の求める智慧とは、ありのままに物事をとらえることである。無常なものもまた、無常なものとして、ありのままに受け取る。これと逆に、無常なものを、ずっとそのままであると見て、またずっとあり続けてほしいと執着することから苦が生まれる。

ところで、この無常の教説について、学生から時折聞く感想がある。それは、あらゆるものが変化し、滅しゆくということは分かるが、たとえ真実であるとしても、それを心に留めて生きるのは、悲しみや不安に満ちた暗い生になるのではないか、後ろ向きな生き方につながるのではないか、といったものである。

このような感想は理解できる。見たくないものは見ないに越したことはない、という思いがベースにあるのかもしれない。しかし仏教は智慧の教えである。真実をありのままに見ることから、生が実り豊かなものとなることを教えている。

＊　＊　＊

現在、時価総額世界ランキング一位の企業であるアップルの共同創業者、スティーブ・ジョブズは、その死の六年前の二〇〇五年に、スタンフォード大学の卒業生に向けてスピーチを行った。そのときジョブズは、自らの体験をもとに三つの話をしている。巨大テック企業のＣＥＯが、全米を代表する名門校の卒業生に向けて話すスピーチである。最先端のテクノロジーやイノベーションに関わる華々しい話がなされたのだろうと思うかもしれない。しかしジョブズが語ったのは、

大学を辞めたことと、創業したアップル社を一度追放されたことという二つの苦い経験、そして「死」についてであった。なかでも学生たちを惹きつけたのは、最後の「死」の話だったという。少し長くなるが、その最初の部分を紹介したい。

「もしあなたが、一日一日を、自分の最後の日であるかのように生きることができたら、いつの日かきっとその通りになる」—十七歳の時、こんな感じの引用を読みました。感銘を受けた私は、それから三十三年のあいだずっと、毎朝鏡を見て、自分に尋ねてきたのです—「もし今日が人生最後の日であったら、今日しようとしていることをしたいと思うだろうか」と。そして、その答えが「ノー」である日があまりに長く続くたびに、何かを変えなければならないと分かるのです。

もうすぐ自分が死ぬと心に留めておくことは、人生の重大な決断のときに役立つ、私が今まで手にしたなかで最も大切なツールです。なぜなら、ほとんどすべてのこと—あらゆる外的な期待、プライド、混乱や失敗への恐れ—こういったものは、死に直面すれば消え去り、本当に大切なものだけが残されるからです。（スタンフォード大学HPより翻訳）

このスピーチの一年ほど前に、ジョブズは初めてがんの手術をうけている。「死」という重いテーマを選んだのは、そのこともあったのであろう。しかし彼はそのずっと前から、鏡のなかの自分と、そして死

に向きあってきたのである。

ジョブズが若い頃より東洋思想、とりわけ仏教に深く心を寄せてきたことはよく知られている。iPhoneなど彼の手がけたプロダクトのデザインについて禅の思想の影響が指摘されることがあるが、彼のここでのスピーチには、仏教的な精神が確かに息づいているように感じられる。

＊　＊　＊

仏教は無常に向きあうことを説いてきた。古いパーリ経典に、次のような釈尊の言葉がある。

過去を追いゆくことなかれ／未来を願いゆくことなかれ／過去はすでに過ぎ去りしもの／未来は未だ来ぬものゆえに
現に存在している法を／その場その場で観察し／揺らぐことなく動じることなく／智者はそれを修するがよい
今日こそ努め励むべきなり／誰が明日の死を知ろう／かの死王の大群と／約束することなきゆえに（「賢善一喜経」、片山一良訳『中部　後分五十経篇Ⅱ』一三七頁）

私たちはいつ死ぬか分からない。それは明日のことかもしれない。だからこそ過去や未来にとらわれるのではなく、目的に向かっていま勤め励むことが大切である。ここで釈尊は、修行において、いまここにある現象や自分の心に思いを集中させることを説くが、これを仏教的な生き方の指針と受けとめることもできる。

未来を展望し、また過去を振り返るということは、動物のうちヒトだけが持つ特異な能力である。それが基盤となって、人間の社会・文化が成り立っているのだともいえる。しかしこの能力は重荷ともなる。私たちは往々にして過去や未来に過度にとらわれて自由を手放し、大切なことを見失ってしまう。

あらゆる事象は、ひと時も留まることなく変異し過ぎ去っていく。この現実に向きあうことを通じて、私たちはまた自分自身に向きあい、いま自分にとって本当に大切なこと、なすべきことに心を向けるのである。

＊　＊　＊

煩悩を持って生きる私たちにとって、無常はときに、あまりに痛ましい体験となる。しかし仏教は、その無常の真実が、いまここに私が生きることの意義に結び付くのだと教えている。無常であるからこそ、いまここに生きるひと時が、そしていまある人とのつながりが、かけがえなく尊い。このように受けとめて生きることが、はたして後ろ向きな生き方であろうか。

（第三九〇号　二〇二一年十月）

法のことば

我亦在彼摂取之中
煩悩障眼雖不能見
大悲無倦常照我身

（源信『往生要集』正修念仏）

私もまたその救いの光の中に摂め取られているのであるが、煩悩が邪魔をして自らそれを目の当たりにすることができない。それでも仏の大悲心は、その力を弱めることなく、常にわが身を照らしてくださると観ずるのである。（梯信暁『新訳 往生要集 下』、法藏館、三五頁）

「煩悩障眼（煩悩、眼を障えて）」という表現は、私たちの日常の認識が絶対的で唯一なものではないことを示唆してくれます。同時に、煩悩をきっかけとして、認識する主体としての私という見方のみならず、光の中で救われる私、すなわち如来に見守られている客体としての私という見方も生じてきます。

仏教のことばは、内容を理解することも大切ですが、ことばによって変化が促されるという点も重要です。右記はその端的な一例といえるでしょう。

（中西俊英）

（第三九一号　二〇二一年十二月）

構造的に考える、好きなことをする

山岡俊樹

私は社会人の前半を企業でデザインと人間工学を実践し、後半を教員として研究と教育に従事し、ささやかな人生を送ってきました。この経験を通して得た考えを2つ述べたいと思います。構造的に考えることと、好きなことをすることです。

1. 構造的に考える

構造的に考えるとは、モノ・コト、システムの本質を把握することです。構造は、概念・情報に係わる様々な要素をグループにまとめ、目的・手段で階層化した状態をいいます。従って、構造を認識できると、追加すべき要素、不要な要素が分かり、最適な判断を下すことができるのです。

この構造は制約によって定まります。例えば、京都の町家の例です。京都の町家が細長い長方形なのは、江戸時代にあった「間口税」のためで、家の間口3間（約5・4m）ごとに税金をかけることにしたためです。この制約のため、建物の構造（細長く中庭のある建物）が定まりました。このように制約により構造が定まってきます。

我々は制約の中で生活しています。我々の身体は自然環境（空気、重力など）という制約により、その機能、構造が定まっています。この自然環境だけでなく、我々が行動するには様々な社会的制約に適合しなくてはなりません。社会的制約は法律、社会慣習や道徳律などです。我々の行動や思考は、その社会の見えない制約によっても影響を受けています。

私の20代、東芝本社デザインセンターでデザインをしていた時、後輩と一緒に発注したデザインモデル（試作品）のチェックのため、モデル屋さんに行くことになりました。訪問する途中、彼が煎餅のお土産を持っていたので、不思議に思って聞いてみました。すると、彼はモデルを作る職人さんに、気持ちよく仕事をしてもらうため持参したというではありませんか。一本取られたと反省しました。その当時、私は近代主義の考え方の影響を受け、効率・合理性が一番大事だと無意識に考えていたのです。このように人々の行動に影響を与えている社会的制約を把握することにより、すべき最適な行動を考えることができます。

製品、操作画面やサービスのデザインをする際、それらに影響を与えているのは何か、我々の行動に影響を与えているのは何かを構造的に考えるのが非常に重要です。それには行動観察を行い、ユーザの価値観を把握し、それをデザインに反映させる必要があります。一例として、私が業界初の操作部が傾斜した鉄道用券売機のデザインを東芝から発売できたのも、三日間、阪急梅田駅で行動観察した成果です。

ＵＸ（ユーザ体験）デザインが２００５年ごろから活発になり、デ

ザインする場合、体験に基づいてデザインするのは当たり前でしたが、なぜかその必要性の説明ができませんでした。その構造を特定できないと理解することにはなりません。海外の文献を見ても、UXが必要であるという前提で書かれたものばかりでした。アリストテレスの幸福論や特に早大名誉教授の加藤諦三氏の「人生は祭りだ」の言説に触れて、祭りだからこそ楽しくなるUXが必要になるのだなと構造的に納得したという経緯があります。

構造的に思考すると、見えなかった世界が見えるようになります。従って、何をすべきか分かり、計画的に行動できるようになります。

人間工学で博士号を取り自分の専門領域にしたのも、デザインだけでは理解困難な複雑なシステムでも構造的に把握できるようにするためでした。

2. 好きなことをする

小学生のころから現在まで私に寄り添ったのはモノ作りと音楽でした。母親の実家が横須賀で小さい造船所を経営しており、小さいころよく遊びにつれて行ってもらい、木の香りや鉋で木を削る音などを聞いて育ちました。小学生時代は勉強もせず、自動車のハンドルの構造を知りたくて、自動車雑誌を読んだり、自分でデザインした模型を作ったりしていました。特に、オリジナルデザインのホバークラフトが3mm浮き上がったときの感動は今でもよく覚えています。大学に進学するときは、機械、建築かデザインか、迷いましたが、身近なモノづくりがしたく、最終的にデザインにしました。やはり好きなことをす

るのが一番いいのではと思います。

音楽はもっぱらクラシック音楽で中学生あたりから本格的に聞き始めました。クラシック音楽は最初に聞くには壁が高く、分かりにくいのですが、何回も聞いていると理解できるようになります。モーツアルト、ベートーベンから始まり、ストラビンスキー、ウエーバー、ブルックナー、シベリウス、R・シュトラウス他をへて、最近は先祖返りでチャイコフスキーのバレエ曲をバックグランドミュージックとしてよく聞いています。

社会人になってから米国のブルーグラスを聴き始めました。このブルーグラスは米国の中西部で発達し、キリスト教文化を背景にした、リズミックな音楽です。人生を語る内容の曲がおおく、落ち込んだ時、この音楽を聴くと不思議に元気になれるのです。

イタリアの大オペラ作曲者であるベエルディが1893年、79歳の時、ファルスタッフというオペラを作曲しました。高齢でなぜ作曲したのかとマスコミから問われ、今までのオペラは未完成であるので、常に完成を求めているというコメントをしました。ドラッカーはこの言葉を聞いて感動し、生涯仕事をすると決めたそうです。私も微力ながら、それにあやかりたいと思っています。

ある本に、好きだから行うのではなく、行うから好きになると書かれてありました。何事もそうで、自分の努力で夢中になるようにするのが大事ではないでしょうか。

（第三九〇号　二〇二一年十月）

私たちの抱える危うさ

普賢保之

私は今年の三月末に定年を迎えました。退職するぎりぎりまで仕事が入っていたことと、整理整頓が苦手だった私にとって、引っ越しは大変な作業でした。職員の方にも随分お世話になりました。家族にも応援を頼み何とか三月末までに研究室の後片付けを終えることができました。

退職後は妻と海外旅行に出かける約束をしていましたが、コロナウイルス感染症の影響で断念せざるを得ませんでした。そのため温泉に入ったり、美味しい食事をいただいたり、後はひたすら寝て過ごしました。

来年五月までに仕上げなければならない仕事もあって、今は毎日早寝早起きの生活をしています。そして夕方には気分転換に鴨川沿いを散歩しています。在職中には考えられなかった生活です。

先日、大学から持ち帰った本を整理していると、学生時代に集めた資料が目に止まりました。それは加賀乙彦さんの小説『宣告』の主人公、楠本他家雄のモデルとなった正田昭氏の手記と、彼の事件を報じる新聞記事のコピーでした。正田昭氏（当時二十四歳）は昭和二十八

年、東京の新橋で殺人事件を犯し、金品を盗んで京都まで逃走して、犯行後七十八日目に哲学の道付近で逮捕されました。逮捕されたとき「オーミステイク」と叫んだことでも話題になりました。正田氏は東京の有名大学を卒業し証券マンとして働いていました。その彼が殺人を犯し死刑判決を受けたのです。そして一九六九年十二月九日の朝に刑が執行されました。東京拘置所に収容されていたときに、当時拘置所の医務官だった加賀乙彦さんと出会ったのです。加賀さんと正田氏は同じ年で話をするにつれ、互いを深く理解するようになりました。

私は学生時代、正田氏の手記を手に入れたいと、教会を尋ねたことがあります。正田氏は拘置中にカトリックの洗礼を受けていました。私は教会を訪れ保存されていた彼の手記をコピーさせていただきました。その時対応して下さったシスターの言葉が今でも耳に残っています。「何か宗教をお持ちですか?」「はい。浄土真宗です」と答えると、「お若いのに立派ですね」と言って下さいました。宗教を拠り所としている人は、他者の宗教も尊重されるのだと感心しました。

正田氏は死刑執行当日の朝、母親に手紙を書いています。「さあ、お母さん、7時です。あと1時間で出立する由なので、そろそろペンをおかねばなりません。ぼくの大好きなお母さん、愛にみちた、ほんとに、ほんとにすばらしいお母さん、世界一のお母さん（後略）」といった内容です。犯行当時、病気のため思い通りの就職ができず自暴自棄になっていたようです。何れにしても犯した罪は許されるものではありません。ただ加賀乙彦さんの書かれたものを読むと、正田氏は教養もあり読書家で、ものを深く思考する哲学的な人物だったようです。

拘置所に収監されてからの彼を見ると、日常を平穏に暮らす我々とかけ離れた極悪非道な悪人とは思えませんでした。それで正田氏の手記を読みたいと思ったのです。死刑という刑罰の是非についても考えました。自分が当事者かそうでないかによっても、結論は違ってくると思います。

学生時代に習った刑法の先生だったと思いますが、「普通に生活している人間が一番犯しやすい犯罪は殺人です」と聞いたことがあります。私はその言葉に妙に納得してしまいました。

最近の事件でも、人から尊敬されるような立場の人が自分の子どもを殺したり、また日頃素行に問題の無かった子どもが、親を殺すといった事件が起きています。また介護に疲れた家族が親や子どもを殺すという事件もありました。介護という問題がなければ起こり得なかった事件です。医師による嘱託殺人もありました。いじめによる自殺はよく耳にします。加害者が直接手を下していなくても、いじめによって被害者が自殺したのであれば、その行為は殺人の範疇に入るのではないでしょうか。そうしたニュースを耳にすると、他人事ではない気がします。たまたま今、そのような状況下に置かれていないだけで、状況によっては当事者となり得るのではないかと思うのです。もちろん同じような状況下でも犯罪に走らない人も沢山います。だからといって、犯罪を個人の人間性として片付けてしまうことはできないのではないでしょうか。

親鸞聖人は『一念多念文意』の中で

「「凡夫」といふは、無明煩悩われらが身にみちみちて、欲もおほく、

いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」

と示されています。凡夫とは煩悩に塗れた私たちのことです。私たちに貪欲（貪りの心）があるからこそ科学技術は進歩します。また嫉妬心も頑張るための原動力になることもあります。しかし、逆に貪欲が充たされなければ攻撃的になることもあるでしょう。嫉妬心が自身を苦しめたり、他者に向かえばいじめに繋がることもあるでしょう。

私は罪を犯した人間には、罪を犯すような特性があったかのように報じられることには違和感を覚えます。線引きをしようとするのは、罪を犯した人間を特異な存在として、自分とは違うと思いたいだけなのかも知れません。自分の危うさに何となく気づいているからこそ、線引きをしようとしているのかも知れません。同じようなことをしてしまうかも知れない、という不安（恐怖）が自分の中にもあることに気づいているからこそ、線引きしてしまうのかも知れません。

『歎異抄』十三条の中で親鸞聖人は「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」と仰っています。私たちは縁次第でどのようなことでもしてしまうというのです。私たちが今、殺人事件を他人事として論評できるのは、たまたまなのかも知れません。正田氏が生来の極悪人だったとは、とても思えません。様々な条件が重なった結果、極刑に値する罪を犯してしまったように思えてなりません。多面的に深く考える力を養うのが、学生時代ではないかと思います。

（第三九一号　二〇二一年十二月）

障害者職業カウンセラー

倉本義則

「職業リハビリテーション」や「障害者職業カウンセラー」という言葉をお聞きになったことはあるでしょうか。心理や教育、福祉などに関わる領域でありながら労働分野のことであるため、学生のみなさんには馴染みがないかもしれません。私は以前、同職で仕事をしていましたので、これらについて紹介してみたいと思います。（注:法令にあわせて、ここでは「障害」という表記を用います）

国の障害者雇用施策に関わる分野・職種ですので、まず、障害者雇用施策の基本について、簡単に説明しておきます。柱となるのは二つの制度です

障害者雇用率制度

事業主は従業員数に応じて一定割合以上の障害者を雇用しなければならないという、障害者の雇用を義務化する制度です。その割合（法定雇用率）は、民間企業では現在二・三％です。つまり、従業員一〇〇〇人の企業では二十三人の障害者を雇用する義務があるということになります。国、地方公共団体などの場合は、雇用しなければならな

い割合は若干高く設定されています。

障害者雇用納付金制度

先の制度と連動するものです。法定雇用率を満たしていない事業主から満たしていない程度に応じて納付金を徴収します。納付金は、障害者を多数雇用している事業主に対して報奨金などとして、また、障害者を新たに雇用する事業主に対して各種の助成金として支給されます。このように、事業主間での障害者雇用に関するアンバランスを調整し、事業主が全体として社会連帯責任を果たしてもらうという制度です。

職業リハビリテーション

以上の二つの制度が柱になっていますが、実際には、障害者に対して職場定着に至るまで職業リハビリテーションの専門的支援を行うことが重要になります。「リハビリテーション」は、元来は「再び（Re-）適合（Habilis）すること」、つまり、「再び適した〝資格ある、権利ある〟者にする」という意味を持っています。世界保健機関（WHO）はリハビリテーションを「障害者の社会統合のための取り組み」として位置づけており、また、リハビリテーションには医学、教育、職業、社会の四つの専門領域があるとされています。職業リハビリテーションについては、ILO（国際労働機関）第99号勧告などによって国際的な基準が示され、日本もそれに沿った施策を展開しています。なかでも一九八七年に旧法から改称された「障害者の雇用の促進等に関する法律（以下、「障害者雇用促進法」）」は、現在の日本の職業リハビリ

テーションの体系を規定するものとなっています。

障害者職業センター

職業リハビリテーションの支援は具体的に言うと、職業相談、職業能力評価、就職にむけた準備訓練や職業訓練、就職先の紹介、職場適応のための支援などになります。就職先の紹介などの一部を除き、全国にある「障害者職業センター」が中心となってこれらの支援を提供しています。障害者職業センターは、障害者雇用促進法に基づいて、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構（以下、「機構」）が運営しています。また、そこには「障害者職業カウンセラー」が配置されることになっています。

障害者職業カウンセラー

障害者職業カウンセラーは、障害者雇用促進法において「厚生労働大臣が指定する試験に合格」し、かつ、「同大臣が指定する講習を修了した者その他厚生労働省令で定める資格を有する者でなければならない」と規定されています。実際には、機構の行う障害者職業カウンセラー職採用試験に合格する者ということになります。出身学部の制限はありませんので、関心のある人はだれでも受験できます。合格後、「厚生労働大臣が指定する講習」を定期的に受けることになります。

障害者職業カウンセラーが担う職務については、機構のホームページで次のように紹介されています。「障害者雇用の分野で直接的・専門的な支援業務を行います。障害者に対して、就職相談や職業能力等の

評価、就職準備から職場適応に至るまで、個々の障害を踏まえた多様な支援を行いつつ、障害者雇用を進める企業に対して、障害者の雇用管理上の課題に応じた職務設計や社員研修等の体系的な支援を行います。加えて、関係機関や企業に対して支援技法の助言や普及も行う『職業リハビリテーションの専門家』です。」。

新しい広がり

自分のことを振り返ると、障害や職業についての知識、社会経験が乏しいままこの仕事に就いたので、同職の先輩はもちろん、障害のある方ご本人やご家族、ハローワークや医学リハビリテーションなどの関係機関の方々から、実務を通じて学ぶことがとても多かったと感じています。また、規模も業種も異なるさまざまな会社を訪問して多様な仕事を知る機会が頻繁にありましたが、私には自分の世界が広がるような大変興味深く、貴重な体験でした。

近年では、ＩＴ（情報技術）分野の専門性の高い仕事に発達障害者を採用するなど職務等の開発に先進的に取り組む企業や、障害者の就労支援を専門的に行う民間団体、また、専門性の高い就労移行支援を行う施設などが次々と現れています。このように、職業リハビリテーションは既存の枠組みを超えて、新しい広がりが生まれています。若手も活躍している分野です。関心のある方は、是非調べてみて下さい。

（第三九一号　二〇二一年十二月）

おもふがごとく衆生を救う

森田眞円

〈娑婆の縁尽きて〉

新年明けましておめでとうございます。みなさん、それぞれに楽しいお正月を過ごされたことでしょう。いよいよ学校が始まり、学年末試験が近づいてきましたので、お正月気分を抜いて新しい年に向かって頑張って下さい。

私は現在、三回生の「仏教学ⅡB」を担当していますが、講義ではしばしば『歎異抄』を取り上げて親鸞さまのお言葉を紹介しています。『歎異抄』第九条では、親鸞さまのお弟子である唯円房との対話の中で、親鸞さまが、

なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり　（聖典85頁）

と述べられる一段があります。

この親鸞さまのお言葉について、私には忘れられない思い出が二つあります。一つは、私の兄との対話です。私の兄は医者ですが、今から四十年程前、兄が医者に成り立ての頃のことでした。新米の消化器系外科の医者であった兄は、あることで悩んでいました。当時は今と

違って、癌になられた患者さんに対して、癌であることを告知しないというのが常識でした。当時は癌は「不治の病」であった為、癌告知は「死の宣告」に他ならないと考えられていたからです。ですから、兄は自分の担当している患者さんから「先生、癌じゃないですよね？」と問われる度に、「大丈夫ですよ。癌じゃないですよ」と応え、最後まで嘘をつき続けなければなりません。患者さんは、担当の医者だけが頼りです。自分を信頼して下さっている患者さんにずーっと嘘をつき続け、そのまま最後まで本当のことを知らずに（どこかで感づかれるのでしょうが…）お亡くなりになっていきます。兄は、「人間の終わり方がこんな形で良いのだろうか？」と悩んでいたのです。

そんな難しい問題に、何の言葉もかけられなかった私ですが、親鸞さまの先の言葉を紹介しました。「どれほど名残おしく思っていても、この世の縁が尽きる時が必ずやってくる。その時、ただこの命が終わってしまうだけではなく、覚りの世界である『浄土』に摂め取られていく」という親鸞さまのお言葉を聞いた兄は、「ふ～む。そんな終わり方が出来れば良いなあ」と呟いたことを思い出します。

〈遺された言葉〉

もう一つは、本学の卒業生のTさんとの思い出です。今から十五年程前のことです。Tさんは福井県のお寺の坊守（ぼうもり）さんですが、夫である住職さんが、癌で亡くなられました。その当時、高校生や中学生であった三人の子供さんたちを遺して亡くなられたのです。坊守さんであったTさんは、住職さんに代ってお寺の法務を勤めなければなりません。

そこで、京都の西本願寺に通って、住職の資格を得る研修を受けられることとなったのです。

さまざまな研修の中には、もちろん親鸞さまの教えの内容を勉強する研修があります。たまたま、その研修の講師であった私とTさんとは、昔からの知己でした。そこで、休憩時間にいろいろ話をしていると、なにかの話から『歎異抄』のことが話題になりました。私が何気なく第九条の「なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり」という言葉を出して、親鸞さまと唯円さまとの対話の話をしていた時のことです。

ふと気がつくと、Tさんは眼にいっぱい涙を浮かべておられます。「どうかしましたか?」と私が尋ねると、Tさんはその涙の訳を語ってくださいました。その当時は既に癌を告知する時代になっていました。ですから、癌であることを承知しておられた夫の住職さんは、病気が重くなっていく中で、何度となくこの言葉を口にしておられたそうです。Tさんは、夫がよく口にする言葉の意味がよくわかっていなかったのですが、いまはじめて、この言葉が『歎異抄』第九条の言葉であったことを知ったと仰り、その意味を知って夫の心中を思い、思わず涙が溢(あふ)れてきたのですと話されたのでした。

〈おもふがごとく救う〉

まだ成人していない子供たち三人を遺して往かねばならない。Tさんのことやお寺の後のことも随分気がかりであったに違いない。住職さんは、まさに「なごりをしく」思う気持ちでいっぱいであったこと

でしょう。けれども、どれほど「なごりをしく」思っても、娑婆の縁が尽きたなら力なくして終っていかねばなりません。

同じ『歎異抄』の第四条には、

浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり

（聖典82頁）

という親鸞さまのお言葉が記されています。

これは、浄土に生まれたものは直ちに仏さまとなって、今度は迷いの世界にいるものに対して大悲の活動をして、思い通り救うことができると示されているのです。先ほどの第九条の言葉と思い合わせると、執着や煩悩から離れられない私たちのような凡夫が歩んでいくべき往生成仏への道が示されているといえるでしょう。

この世に未練たっぷりであって、この世の執着から離れられない凡夫の身でありながらも、娑婆の縁が尽きたとき「かの土」である浄土に参らせていただき、仏のさとりに導かれることが定まっているのであります。そして、浄土の世界で速やかに仏のさとりを恵まれ、「大慈大悲心をもって、おもふがごとく衆生を利益する」と示されています。

住職さんは、どれほど名残おしく思ってもこの世の縁が尽きたならば、直ちに仏となって、Tさんや子供達に大悲の活動を行い「おもふがごとく救う」決意を自らに言い聞かせておられたに違いありません。凡夫の身でありながら、往生成仏の道を歩むとは、こういう生き方が恵まれることに他ならないのです。

（第三九二号　二〇二二年一月）

幹の研究・葉っぱの研究

八田　一

京都女子大学でお世話になり24年目、勤続表彰25年には1年足らずに残念ですが、本年度末で定年退職いたします。みなさん、24年間、公私ともにお世話になり、大変ありがとうございました。定年を迎えるにあたり、「芬陀利華」編集者から原稿の依頼を受け、仏教や宗教に関係する文章になるかどうか自信はありませんが、卵の研究者が今、研究に対して何を感じ、何を思っているか書いてみます。

私は「卵の研究40年」とか「卵のことなら何でも」とか、教育研究活動で自分の専門を強調して積極的にアピールしてきました。その甲斐あってか、卵の研究では学会や業界やマスコミでも名前が知られるようになりました。思えば２００４年に初めてたまご研究会を開催し、10年間は会長を務めて名前が売れました。その後は副会長として日本たまご研究会事務局を担当し、毎年秋に本学のＢ５０１教室をお借りしてエッグサイエンスフォーラムを開催し２００～２５０名の参加者と交流してきました。特に、２０１８年には日本初の国際たまごシンポジウム@京都の議長を務め、世界の卵研究者とも連携することができました。

本年度は私にとって最終年度でありますが、卒研生8名および博士過程の学生1名と「卵のことなら何でも、All about hen eggs !」をモットーに鶏と卵に関する研究に取り組んでいます。そんな中で最近思うのですが、研究には幹の研究と葉っぱの研究があり、うまくバランスを取らないと社会に役立ついい研究ができないと思うようになりました。

そもそも研究って何でしょうか？　私は寝ても覚めても考え続ける知的作業だと思います。そのうちに考えが熟成し、問題を解決するべく仮説（アイデア）が出できます。実験をデザインし結果を出して仮説を検証します。どのような研究テーマにもオリジナリティが求められ、得られた研究成果により未知が既知になることはもとより、従来の不可能が可能になり、種々の問題を解決できるのが社会に役立つ研究だと思っています。

さて、この年齢になると学会や学術雑誌社から、投稿論文に対する査読審査依頼が増えてきます。特にこの5年は毎年鰻登りに増加し、いくらAll about hen eggs !をモットーとして卵関係の論文審査は全て受けるようにしていますが、物理的な時間には限度があります。ほぼ半数は中国人研究者の投稿論文で、昨今の欧米と中国の科学技術に関する覇権争いを何となく肌で感じます。

私の専門分野の論文査読で感じることは、年々、葉っぱの研究が多くなってきたことです。それどころか最近ではその葉から滴る雫のような研究が多く、たくさんお金をかけて緻密なデータを集め、重箱の隅を突くような狭い部分ではありますが、帰納的にかつ論理的に結論

が導かれています。論文の構成としては非の打ちどころがないのですが、それでこの研究は何の役に立つのかと思ってしまいます。

問題はその論文の基になる幹の研究が見えないのです。研究で最も大切な背骨となる木の幹を見ず、枝や葉も越して、葉先から落ちる雫に着目するマニアックな研究には、夢や希望や驚きや感動が全く感じられません。今の世の中、分析技術や統計解析技術がおそろしく進歩し、しかもアウトソーシングが可能で、依頼すれば微に入り細を穿つデータが購入可能です。おそらく、溢れるデータをまとめるのに精一杯で研究の本質を深く考えることまで気が回っていないのです。

現在のネット検索技術を駆使すれば、研究室にいながら自分の専門に関する世界中の研究論文を瞬時に集めることが可能です。その中から自分の研究テーマに関するよく似た論文を探してフォーマットとして、同じように実験を組み立て、必要に応じて共同研究者を組織してデータを融通し合い、形を整えて論文投稿するという道筋ができているのだと思います。

各研究者は、競争的研究資金を獲得するのに論文数が必要であり、通常は論文の量産化を第一目的としています。そのためにも、自分の専門技術で種々の研究プロジェクトに参加し部分部分で協力する方が効率良く、木を見て森をみずならまだしも、葉っぱを見て幹が見えずの研究に陥ってしまうのだと思います。

昔のように図書館へこもって文献を検索し、実際に論文掲載誌を手にして興味深い論文を読みあさり、しばし沈思黙考し、さらに引用文献を書架から書架へと探しまくる作業経験が必要なのです。現在の

ネット社会で言うと、瞬時に集まるたくさんの情報をしっかり熟成させ、そこから生まれる研究アイデアの幹を確認したり、枝葉を考えたり、それを繰り返して、次第に自分の研究テーマのオリジナリティーを顕在化していく作業が必要だと思います。

要するに研究テーマはしっかり情報を詰め込み準備した頭の中の熟成を待って絞り出されるものであり、決して文献検索ソフトで既存の論文からフォーマットを探して行うものではないのです。当然、幹に近い研究の方がその成果の重要性も高くインパクトが強くやりがいがあります。私の経験では、幹の研究は10年に一度会えるかどうかです。それが太い幹であればあるほど育てがいがあり、枝葉もたくさん付きますので、一生もんの研究でライフワークとなります。

私のライフワークは鶏卵抗体IgY（感染症予防卵）の有効利用研究ですが、かくいう私も高齢者の仲間入りをし、本年度末で定年を迎えます。これからあと何年研究者でいられるかわかりませんが、寝ても覚めても24時間、研究のことを考えられる内はもう一つ幹に近いところで卵の研究ができたらと思っています。

（第三九二号　二〇二二年一月）

シリーズ
ことばの窓

①言ってはイケナイ言葉

何でも自由に言ってよい社会、というのは有史以来存在したことはなく、これからもやってこない。権力と言葉はとても仲が悪いのだ。

言霊信仰は、言葉には不思議な霊威があって「その力が働いて言葉通りの事象がもたらされると信じられた」（広辞苑）ことで、だから安易に口に出しちゃいけないという圧である。そんな古い話でなくても、身の回りにも規制はいろいろある。結婚披露宴の席では、「割れる」「裂ける」「わかれる」などは禁物とされる。「終わり」や「四」も縁起が悪いから「お開き」「よん」と言い換える。駄目と言われると使いたくなるのが人情というものだ。またやむなく使わざるを得ない状況に遭遇しないとも限らない。たとえばそそっかしいあなたが披露宴に呼ばれたとする。友人代表でスピーチをするために席を立つ。大事な友人の盛典を祝いたいと心底思っているのだが、ただでさえ粗忽なうえに緊張も加わる場だから、ついでに言えば着慣れない振り袖など着ていたりするものだから、引っかけてうっかりラウンドテーブルからグラスや皿を落として割ってしまうことは必定だ。割ってしまいました、お払い箱にしてください、とは口が裂けても言えない。さあどうしますか。

ひとびとの知恵というのは侮れないもので、さまざまに言いわけや言い逃れを工夫している。数が増えてめでたいですねえ、と縁起良く言い換える。こうしたかなり馬鹿馬鹿しいが、なるほどと思わせる人間の営みに出くわすのが文学の世界だ。

馬鹿といえば、近ごろは人に向かって「馬鹿」とうかつに言えない風潮である。人格の否定でよくないのだそうだ。愛玩する動物様に「おまえは馬鹿でちゅね～」とやに下がった声で言うのは共感さえ呼ぶのに、である。馬でも鹿でもない人間なのだから、言われても堂々としているのが人間の証しではないのか。鹿を指して馬と言い、異を唱えた者を処罰したという秦の時代の横暴な権力者の話があるから、なるほど「馬鹿」とはもともと口にするに危うさを含んだ言葉なのかもしれない。紫式部も読んでいたという噂の『史記』に出て来る逸話で、さすが中国と思うのだが、日本も負けてない。小説の神様と呼ばれた志賀直哉は、文学史に燦然と輝く『暗夜行路』で主人公の時任謙作に、山羊に向かって「やい馬鹿」と言わせている。おい正気か。山羊は山羊だぞ。凄すぎる。

馬鹿と言われて泰然自若としている大人の山羊を見習いたいと思う。

（坂本信道）

（第三八六号　二〇二一年四月）

②人間の姿

私は今、フランスの作家アンドレ・ジッドが、ドストエフスキーの作品について書いた評論を読んでいます。

ジッドは、ドストエフスキーの作品の登場人物について、「智性や意志の一切は、彼等を地獄に突き落とすように見える」とか、「彼の最も危険な人物は、又最も知的な人間である」とかと書いています。そして「意志と智性とが善に向かって努力しても、それ等の到達する徳は倨傲（きょごう）な徳であってそれは必ず敗滅に導く」とまで述べています。

普通、意志と智性が備わっているのは申し分なく、そういった人物が成功を収めるのではないかと思います。そういった人物が「善に向かって努力」するのは素晴らしいことのように思います。しかし、ジッドは福音書の教義に共感を示し、人間の智性や意志は傲慢さに通じると疑いを示しました。「キリストによって約束された至福の状態は、もし人間の魂が己れを拒否し、己れを放棄するなら」「今から直ちに到達される」と述べています。

このようなジッドの考えは、仏教の示す人間の姿と共通するような人間観に支えられているように思います。

森田真円先生の『ひらがな真宗』には、「たいていの場合、自分が正しいと思っているもの同士が、争いになるものです」と述べられています。「人間が罪深いとか、凡夫（ぼんぶ）であるというのは、自分で悪いとわかっている程度のことを指していわれるのではありません。」

人は全てを完全に客観的に把握することはできないのに、「自分が正しい」という思いを持つということです。これは記憶しておくべき人間の姿であると思います。自分が納得できることだけを信じるという姿は、傲慢に思えてきませんか。何かを学んでいくにあたっても、自分の頭を働かせて考えることは必要ですが、そればかりでは、身につ

けられるものが、その時点で自分が価値を認められるものだけになってしまいます。

森田先生は、続けて述べられています。「仏さまの光に照らされれば、きっと自分では気づいていない、想像もできないような無数の罪深い行為とその結果があるのだと感じられます。」「仏さまに照らされて罪深さを歎(なげ)きながら、それだからこそ救うという仏さまのお慈悲に抱かれている慶(よろこ)びがあるのです。」仏さまの光に照らされて感じる罪深さの嘆きと一体に、仏さまに抱かれている慶びがあることを述べられています。

ジッドの書物ではこの慶びについては触れられていないように思え、今後考えてみたい問題です。

（宮崎三世）

（第三八七号　二〇二一年五月）

③「ちょっとした」違い

かつて、「KY」というフレーズが、盛んに用いられました。「空気読めない」という表現を元に、二つの文節から頭文字をとった言葉です。

人と人との意思疎通は、主として言語に拠りますが、コトバだけの遣り取りでは、限られた情報しか授受できません。相手の口調や表情、身振り手振り、さらには、まさに「空気」としか言い様のないものを感じ取ることによって、相手の気持ちの陰翳等の大切な主観的情報を、私たちは実に敏感に感知しています。それによってコトバの受け取り方も大きく異なってきます。現今の、マスクをした状態での会話では

相手の表情が読みにくく、思いもしなかった厳しい反応が返ってきた経験を、皆さんもおもちではないでしょうか。

昨年度から始まったオンライン授業では、まして、相手の様々な情報を受け取ることが難しく、話者も聴者も、戸惑うことが頻繁に発生します。オンデマンド授業動画となると、授業を受けている方からのフィードバックが完全に欠落しており、「空気を読む」ことは全く絶望的です。このような現在の特殊状況では、なおさら言葉遣いに神経を尖らせることが、まずは、求められています。今回は、「ちょっとした」違いのあるコトバにふれます。

皆さんは、「終日」と「全日」との使い分けを明確にご理解されているでしょうか。前者は「一日中」という意味の言葉で、必ずしも24時間ではなく、状況次第で継続時間が決定されます。後者「全日」も、「一日中」という意味ももっていますが、「毎日」という意味もありますので、注意が必要です。

「万一」と「万が一」とは、どうでしょうか。ともに「万に一つ」という意味ですが、「万が一」の方が、より強調されて聞こえます。「重い」を「重たい」と表現しても同様でしょう。ただし、こういう強調表現は、話者の気持ちまでも強く伝えようとするため、聴者の側で、その「気持ち」を余計なものと感じてしまう危険性があります。「朝から」を「朝っぱらから」と強めて表現するのも、そうしたリスクがある上に、くだけた印象まで与えかねません。聴者が、このような余計なものを押しつけられ不快だと感じてしまったなら、意思疎通に大きな支障を来しかねません。

会話という、人間の基本的行動にとっても、現在は、非常に厳しい状況にあります。ただ、せめて、これを、コトバについて改めて思いを致す機会にしたいと思います。

（田上　稔）

（第三八八号　二〇二一年六月）

④身にしむや

数年前、蕪村の句を授業で読んだことがある。

身にしむや亡き妻の櫛（くし）を閨（ねや）に踏む

「秋夜、暗い寝間の片隅でふと踏んだのは亡妻の櫛であった」（蕪村全集）として「小説的虚構の句」とされる。

しかし、なぜ櫛が閨に落ちていたのか。妻の亡霊が残していったとは怪奇趣味に過ぎる。亡くなって直後に寝間が散らかったままになっていたのか。そうであれば「身にしむ」ではなく、もっと激しい悲痛の表現となるのではないか。それに、気付かずに踏んだのであれば、驚いて足を外した瞬間の感覚が詠まれたことになるが、そのことも「身にしむ」の持つじわじわと沁みわたる語感にはふさわしくない。

櫛は「く・し」、即ち「苦・死」でもある。一旦落した櫛は一度足で踏み付けて「苦・死」を祓ってから拾うという慣習があるという。そうであれば、知らずに櫛を踏んだのではなく、拾い上げるために自ら踏んだのではなかったか。死後しばらくして少し落ち着いたころ、妻

の遺品を整理していて櫛が落ちているのに気付く、もしくは、櫛を手にして、妻が梳る姿を思い出しでもして、つい取り落してしまった際の句と考える。

櫛を拾い上げるためにはその櫛を踏まねばならない。妻の形見を踏みつけるとは気の進まぬことだ。それに、妻の櫛は妻の苦しみと死の恐怖でもある。櫛を足で恐る恐る踏みながら、死を前にしての妻の苦痛と不安が蘇る。足の裏の櫛のこまかい歯の一本一本の触感が、妻に掛けた苦労と、先に一人で逝かせてしまった後悔とを、微細にしかし鋭敏に思い起こさせる。そのような深切で微妙な寂寥感を、蕪村は「身にしむ」の語で以て受け留めた。

「身にしむ」は、和歌の世界で、藤原俊成の「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」（千載集）をはじめとして、痛切な心情が秋風と重ね歌われてきた。それを蕪村は、秋風の触感に代えて、同じ肌でも足の裏の触感という風雅ならざる具象的・即物的なものに置き換えた。その落差を面白がるのが俳諧であるが、蕪村の発見した足の裏の感覚が真に迫るものであったがゆえに、和歌での痛切な心情をも取り込んで、新たな詩情を生みだしている。現代の注釈書がこの時蕪村の妻は健在であったと無粋な指摘をするのも、そう言いたくなるほどにこの句は真実の情を言い当てているからなのであろう。

（大谷俊太）

（第三八九号　二〇二一年九月）

⑤「正しい」語義？

「情けは人のためならず」の俗用「相手のためを思うなら情けをかけるな」を、「現代の誤った用法」と断った上で辞書に掲載したところ、何本も抗議の電話を受けた――よく知られた中型辞書の編纂者の講演で聞いた話である。なぜ、と私は首をひねり、続けてほとんどの抗議の中身が「たとえ誤用と書いてあろうと、辞書に掲載してしまったら、その語義を認めたことになるではないか」という趣旨であったと聞いて、そういう考えもあるのかと、変に感心してしまった。

この「抗議」の背景には、「正しい語義を守っていくべきだ」という意識があるとおぼしい。これが「従来の語義がたとえ忘却されてしまったとしても、辞書から捨てるべきではない」という主張であるならば、私は「そのとおり」と即答するであろうが、「俗用を載せるな」となると、辞書への、少なくとも語義の史的変化も明示することを本分とする（はずの）中型辞書への要望としてはいかがなものだろうかと思ってしまう。

たとえば、「片腹痛い」という慣用句がある。相手の言動を取るに足りないものと嘲笑する意であるが、辞書を紐解けば、本来は「傍ら痛し」であり、かな遣いの誤認から「片腹」と理解されるようになったと知れる。人の言動に対して気を揉んだり、ハラハラしたりする意である。『日本国語大辞典』（第二版）によれば「片腹」の表記は早くも藤原実資の漢文日記『小右記』長和三年（一〇一四）の記事に見える。意味の誤認については、『日国』では『枕草子』など平安時代中期の作品を引くが、これらの例は本義で理解してもよさそうで、確実な例は、

十七世紀初頭成立の「おかしくて片方の横腹が痛い……笑うべきこと、嘲るべきこと」という『日葡辞書』の語釈あたりではないかと思う。

以降、近松やら露伴やら鏡花やら、名だたる作家たちが「誤用」しているわけだが、彼らを「誤用を氾濫させたとんでもない連中だ」と批判する人はまずあるまい。「正しい語義」を「本来の語義」と考えるなら、我々は現存最古の記紀萬葉に帰る必要があるが、とうてい無理である。「ことばは移り変わるもの」というとあまりにも月並み（この使い方も「誤用」かもしれない）だが、ある程度の規模の辞書は「誤用」も載せてこそ役割を果たせる、そう思う私は、くだんの編纂者の判断に敬意を表している。

（池原陽斉）

（第三九〇号　二〇二一年十月）

⑥さようなら「ら」？

「ことば」そのものではなく、それを記す文字、特に平仮名の「ら」を取り上げたい。

以前から気になっていたのだが、ここ十数年のうちに、「ら」の形が変化してきた。例えば、一画目は本来、点「、」なのだが、左から右に横線「一」を引く人が少なくない。横線の例の一つが、衣料品のチェーンストア「しまむら」のロゴである。

また点や横線を、二画目の書き始めの位置と同じか、もっと下のほうに書く人も多い。その結果、横線の場合は数字の「5」と区別がつきにくくなってしまっている。前の職場（小中学校の教員養成大学）でこのような書き方をしている学生達に書き順をたずねたところ、約

半数は、まず縦線から書き、最後に点を打ったり横線を書いたりすると答えた。

昨年四月に赴任して以来、オンライン授業が多く手書きを見る機会は少ないが、「ら」の形については本学でも同様の傾向が見られる。個人の書き癖のレベルを超えて字形が変わってきたのである。図案化されたロゴはさておき、子ども向けの「ひらがな」練習帳の表紙も怪しい。

ことばも文字も変化するものなのに私が「ら」の形に拘るのは、「5」に誤読されることを恐れるためでもある。だがそれ以上に、点の位置が下方だったり点ではなく横線だったり、縦線から書いたりするといけないのは、字母である「良」から遠ざかってしまうからだ。点なのか横線なのかも書き順も、「良」を意識すれば自ずとわかるはずなのだが。

漢字（真名）を崩して書いたものを日本独自に表音文字として用いた平仮名は、中国由来のものに基づき、それをやわらげ新たなものを創造するという点で、日本の伝統文化の特長を凝縮したものと言える。それが千百年余り継承されてきた。

そのことは知っていても、なぜ「良」がラと読まれたのか説明できない人もいる。しかし、「奈良」「野良」などの熟語によって、中国南方の呉音の「ラウ（現代仮名遣いロウ）」に誰もが触れている。常用音の「リヤウ」は北方の漢音である。

上代に伝わった仏教関係には呉音が用いられるが、「お経」を「おケイ」、「極楽」を「キョクラク」、「地蔵」を「チゾウ」と読む人に、私

は出会ったことが無い。千数百年前の発音を、自覚の有無に関わらず、私達はある程度体得しているのだ。

「ら」の形が変化し「良」に別れを告げてしまうことは、このような今に伝わる長い文化の歴史と切り離されてしまう点でも残念なのである。

（中島和歌子）

（第三九一号　二〇二一年十二月）

⑦人との関係を映す鏡

或る家庭の朝の一齣を、妻の側から語った言葉――「朝起まして機嫌をきけば不図脇を向ひて庭の草花を態とらしき褒め詞、是にも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど」――これは、樋口一葉の小説「十三夜」（明治二十八年）の中の一節。女主人公のお関は路傍で見初められ、熱烈に求婚されて原田勇と結婚します。が、半年を経た頃から勇の態度が激変し、その後の約七年、一方ならぬ精神的苦痛に曝されながらもひたすら堪えてきた彼女は、遂に旧暦十三夜の夜、実家に戻り、離縁を両親に願い出ます。

本作で重要なのは、三人称の語り手が設定されているにも拘わらず、この夫婦の不仲は、勇を「鬼」と呼ぶお関の言葉によってのみ読者に伝えられ、勇の心中に何があるのかということを、語り手が語る機会を一葉が設けていない、という点です。先の引用の傍線部はお関の主観ですが、勇の真意はどうだったのか、それは、勇を非難するお関の言葉の端々から汲み取りながら読むしかありません。しかしそうやっ

て作品の言葉を丁寧に読んでゆくと、一葉が描きたかったのが〈非道な男に虐げられる哀れな女〉といった単純なことではなかったことが見えてきます。勇に対して型通りの対応をするお関と、それに不満を持つ勇、冒頭の引用部も、作中のお関の他の言葉とつき合わせて眺めた時、別の相貌を表し始めます。人と人との心がすれ違い、届くべき人の心に思うように届かずに、行き場を失って彷徨う言葉がそこにはあります。

「ことばの窓」と題して国文学科の教員で繋いできました連載も今回で最終回となりました。人は言葉を用いて思考し、大切な人に思いを伝えようとしますが、自分の思いを相手に伝えることが如何に困難か、「十三夜」の夫婦のすれ違う言葉から、それが如実に感じられます。伝えようとするということは、同時に容易に伝わらないということを経験することでもあり、そういう人間同士の営みの中で生まれる悲喜こもごも、そうした情緒の花々が、文学作品の中には咲き乱れています。

一つの言葉もそれを交わし合う人同士の関係を鏡のように映し出し、その時々で様々な色合いを帯びます。通常言われたら不愉快かもしれない言葉も、好きな人から言われたら嬉しい、そういうこともあります。そう、連載第一回目で取りあげられていた「馬鹿」という言葉も、私にとってはそういう言葉の一つです。

（峯村至津子）

（第三九二号　二〇二二年一月）

シリーズ

智慧の蔵

『令和版　仏の教え　阿弥陀さまにおまかせして生きる』

大谷光淳 著

幻冬舎　二〇二〇年

「どうしたらどん底から立ち上がる力を得ることができますか？」「人は死んだらどうなるのですか？」「よいことをするとご利益はありますか？　悪いことをするとバチが当たりますか？」「お経は何のために唱えるのですか？」等、多くの疑問に対して、一問一答の形式で書かれた書物です。著者は、若くして浄土真宗本願寺派第25代門主になられた大谷光淳氏です。

「お伝えしたこと～序文にかえて」の所に、『仏教に「摂取不捨」という言葉があります。「摂取」とは、仏さまが自分の懐の中に、慈悲の手の中に摂め取って、捨てない、見放さない、ということです。それは、「どんなに辛く悲しい状況に置かれようとも、私はあなたを決して見放さない」という仏さまからの最強のメッセージです。』とありま

す。私たちは、仏さまの「摂取不捨」のお心に出遇わせていただくことによって、この人生を、いのちいっぱいに生き抜かせていただくことが、できるのです。

以前、「仏とは、自らがさとって終わりではなく、真実をさとったがゆえに、真実がわからず迷い苦しんでいる者を、真実に導かずにはおれない方です。」という文章を読んで、『「大きなお世話」という言葉が頭に浮かんでいました。』という感想を書いてくれた学生がいました。しかし、それは否定的な意味ではなく、続いて、『現代日本ではあまりよくない意味で用いられることの多い言葉ですが、「大きなお世話」とは「自分には余りある奉仕」、すなわち「仏さまのお導き」と捉えることもできるのではないかなと感じました。なんにせよ、仏の慈悲の心が、常に私たち全てに向けられていることは本当にありがたいことだなと思いました。』と書かれていました。

また、ある哲学者は、仏さまの「摂取不捨」のお心を聞いて、「仏さまって、気の長い方ですね」と言われたそうです。

正しく物事を見ることができず、迷いの人生を生きているこの私。迷っていることさえも気づいていないこの私。そんな私をどこまでも「摂め取って捨てない」と、はたらき続けてくださっている仏さまが、いらっしゃるのです。本当に有り難い「大きなお世話」「気の長さ」だと思います。

「摂取不捨」という仏さまからの最強のメッセージに、耳を傾けてみてください。

（小池秀章）

（第三八六号　二〇二一年四月）

『ガンダーラ美術にみる ブッダの生涯』

栗田　功 著

二玄社　二〇〇六年

私が小学生のある時期、平日の夕方にドラマ西遊記の再放送がやっていた。堺正章さんが孫悟空、岸部四郎さんが沙悟浄、西田敏行さんが猪八戒、そして夏目雅子さんが「おっしょさん」こと三蔵法師の配役であった。

そのドラマのエンディング・テーマ曲がゴダイゴの「ガンダーラ」であった。当時は気にもとめなかったが、二十歳を過ぎて仏教を学ぶようになってからは、このガンダーラという名に特別の魅力を感じている。なぜなら、ガンダーラは釈尊の滅後、仏教がインド各地に伝搬する中で特に大きな役割を果たした土地の名だからである。

ガンダーラは、現在のパキスタン、ペシャワール盆地の一帯を指す。今はすっかりイスラムの国となった同国やお隣のアフガニスタンも、紀元前後の数百年間は仏教の大変栄えた地域であった。阿弥陀仏浄土教の最初期の姿を記録する支謙訳『大阿弥陀経』の原本は、この地域の言葉で書かれていたことが分かっている。

またガンダーラは、中インドのマトゥラーと共に最も早くから仏像制作が行われた地域としても名高い。純インド風の造形表現が特徴のマトゥラー様式に対して、ガンダーラ様式の仏像はギリシャ・ローマ

の美術に強く影響を受けており、その写実的で優美な造形表現は今も世界中に熱心なファンをもつ。

本書はそんなガンダーラ美術の諸作品に基づいて、釈尊の生涯を順を追って紹介してくれる良書である。釈尊が前世でメーガという青年であった際に燃燈仏より将来の成仏を約束される「燃燈仏授記」から始まって、釈尊の滅後、その遺骨を納めたストゥーパが造られ、人々の信仰の対象となる「造塔」まで―むろんその間には釈尊の八十年の生涯全体を含む―、全七十八のエピソードをその場面を描いたガンダーラ彫刻の諸作品と共に分かりやすく解説してくれている。

京女では全ての学生が必修科目として仏教学を学ぶことになっている。本書はその仏教学Ⅰの副読本として、或いは予習復習用のテキストとしてもお薦めである。だが、一旦勉強を離れて博物館等の図録を眺めるような気持ちで気軽に読んでもらうのもよいと思う。

コロナが終息して落ち着いたら、いつの日かパキスタンのラホール美術館を訪れて、ガンダーラ様式の仏像を是非ともこの目で見てみたいものである。

（上野隆平）

（第三八七号　二〇二一年五月）

『聖徳太子
―実像と伝説の間―』

石井公成 著
春秋社　二〇一六年

伝説と謎にみちた人物、聖徳太子。本書は聖徳太子の実像を、現存する資料をもとに丁寧に読み解いていく。

「聖徳太子」と聞いて、みなさんはどのようなイメージを持たれるだろうか。かつて日本の紙幣に度々登場された人物だ、とか、『憲法十七条』や「冠位十二階」を制定して国の礎を築いた優れた政治家だ、とか、はたまた日本に仏教の導入を牽引した偉大な宗教者であるとか。

聖徳太子のイメージは、時代によって変遷が見られる。本書でも述べられているように、古資料では仏教興隆の立役者。平安時代から鎌倉時代にかけては、浄土信仰の隆盛とともに、人々を浄土へと導く観音菩薩の化身として信仰されたり、中世から戦国時代にかけては兵法の達人、戦いの神としても崇められる。江戸時代になると、四天王寺や法隆寺を建立したことから大工や鍛冶屋・桶屋などの工匠の祖として崇拝され、江戸時代から明治時代にかけては一部の儒学者や国学者から、その政治的立場や異国の宗教である仏教を導入したことを批判されたりもしている。一転、明治時代後半には大国との平等外交の祖、憲法の祖などの功績を通して再評価されていく。戦後になると、『憲法十七条』の「和を以て貴しと為す」という言葉から、民主主義・平和

主義を説いた人物として解釈され、ひろく受け入れられてきた。

これほどまでに、多様なイメージや評価で語られてきた人物が、かつて日本の歴史上にどれほどいただろうか。ただ、その実像については、限られた資料のなかで現在も多くの議論があり、謎につつまれている部分も多い。しかし、その謎がまた人々を惹きつけてやまないのである。

本書は聖徳太子とは一体何者であるのか、という命題に基づいて、古代史・仏教史・美術史などの学術成果を駆使し、太子の実像を広範な資料をもとに考察していく。

「聖徳太子の呼び名」について、「聖徳太子虚構説」について、「聖徳太子一族の滅亡」について。どこか気になっていたトピックを次々と取り上げては論じ、読む者に多くの示唆を与えてくれる。

今年は聖徳太子が世を去られてから、千四百回忌の節目にあたる。本書は千四百年の時を超え、人々に影響を与え続けてきた聖徳太子という人物の実像を、あらためて確認することのできる一冊である。

（赤井智顕）

（第三八八号　二〇二一年六月）

『いつでも歎異抄』

意訳 井上見淳
画 一ノ瀬かおる
本願寺出版社　二〇二一年

『歎異抄』は、日本の宗教書のなかでもっとも有名で親しまれているものと言っても過言ではない。哲学者の西田幾多郎や作家の倉田百三、司馬遼太郎などの愛読書としても知られ、解説書も数多く出版されてきた。本学で仏教を学ばれているみなさまにとっても、講義のなかや月例礼拝での朗読で、再三目にされてきたことだろう。

こんなにも親しまれ、読まれている『歎異抄』であるが、その中身はというと、古文体で、かつ哲学的な文章で書かれているため、なかなか読み進むことができない、と諦めた方も多いのではないだろうか。そんな方におすすめしたいのが、本書である。

本書では、まず、『歎異抄』のあらましや『歎異抄』に出てくる登場人物がわかりやすく解説されている。また、『歎異抄』の解説にあたる「読んでみよう『歎異抄』」では、原文とともに、『歎異抄』の著者といわれる唯円と親鸞の言葉がやさしく語りかけるように描かれている。たとえば、第二条には関東から命がけで京都に訪れてきた門弟に対し、親鸞が真摯に受け答えする場面がある。そこで親鸞は「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という力強い言葉を残しているが、本書では「でもわしはな、比叡山でどんな行

を、どう励んでみても、みな中途半端にしかできんかった。つまり、わしにはどの道、地獄以外に住み家はなかったんじゃから」（本書、二九頁）、と表現されている。このように、本書を読むと、老齢の親鸞が、淡々と、しかし切実に、読み手である私に語りかけるような臨場感を味わっていただけるだろう。

本書の後半には、親鸞の生涯や唯円のエピソードも短編でまとめられており、『歎異抄』をわかりやすく、かつ味わい深く読むことができる。仏教を学ぶみなさまにとっての必読の書としておすすめしたい。

昨今、新型コロナ感染症の影響により、日本だけでなく世界中で不安や不満を抱えることが日常的になっているように感じる。こうした日常について、本書のナビゲーターである若先生はいう。「そういう日常の中でいつの間にか心がつらくなった時、『歎異抄』を開いてほしいんだ。きっとそのたびに大切なことに気づかせてもらえると思うから」（本書、九九頁）と。

（那須公昭）

（第三八九号　二〇二一年九月）

『ブッダとそのダンマ』

B・R・アンベードカル 著
山際素男 訳
光文社　二〇〇四年

著者のビーム・ラーオ・アンベードカル（一八九一～一九五六年）は、インド独立後、最初の法務大臣としてインド憲法の制定に尽力した人物である。不可触民である彼は、カースト制度の廃絶にその生涯を捧げた活動家としても有名である。ヒンドゥー文化の枠内でいくら活動していてもカースト制度の廃絶は見込めないと考えたアンベードカルは、ヒンドゥー教と決別し、一九五六年十月、マハーラーシュトラ州のナーグプルで約五十万もの人々とともに仏教に改宗する。この頃に執筆されたのが『ブッダとそのダンマ（原題 *The Buddha and His Dhamma*）』である。アンベードカルは、本書の刊行を見ることなく、改宗の二ヶ月後にこの世を去る。

刊行後、各国の仏教者や研究者から、アンベードカルの仏教理解に対する批判が相次いだ。たとえば、ブッダの出家の理由をシャカ族とコーリヤ族との水利権の争いへの反発によるものとし、仏教の「苦」を「惨めさ（misery）」「貧窮（poverty）」とした点などが問題となった。事実、これらは近現代の仏教研究に基づけば是認しがたい。しかし、その背景には、当時の不可触民が直面していた井戸水の使用禁止や貧困の問題があった。アンベードカルはこうした不可触民を取り巻

く諸問題を解決する道を仏教に見出し、本書を著したのである。様々な時代や地域に生きる人々の要請に応じて展開した仏教の歴史に鑑みれば、社会的に虐げられていた不可触民を差別から解放することを目指した、アンベードカルの仏教を頭ごなしに批判することは不当のように思う。今もインドでは彼に端を発する仏教運動は続いている。本書はアンベードカルの遺志を受け継ぐ人々にとっての道標であり、まがいもない仏教聖典なのである。

ところで、本書の最後に「浄土祈願」という見出しがある。そこに「光を照らすタターガタ（＝如来）に心より帰依する」とある。これは、親鸞が高僧の一人に選んだ天親（てんじん）の『浄土論（じょうどろん）』に説かれる、阿弥陀仏への帰依を宣べた詩句を間接的に引用したものであることが近年あきらかになった。おそらくアンベードカルはこの如来が阿弥陀仏とは認識していなかったであろう。それでも彼が光を照らす阿弥陀仏に心惹かれ、むすびに引用したことに、浄土真宗との不思議な縁を感じる。

（壬生泰紀）

（第三九〇号　二〇二一年十月）

『ジャータカ物語』

入澤崇 著

本願寺出版社　二〇一九年

本書は『ジャータカ』から四十三話を取り上げ、一般読者向けに物語の内容を解説したものである。ジャータカとは、「ブッダの前世の物語」であり、世界各地の文学、とりわけ『イソップ物語』や『アラビアンナイト』にも影響を与え、検証もされている。また『今昔物語集』の「月の兎」なども、ジャータカ（本書の「兎の施し」）を基本としているし、法隆寺蔵の玉虫厨子には、施身聞偈図の雪山王子や、捨身飼虎図の薩埵王子がジャータカとして描かれており、日本への影響もある。

現存する「ジャータカ文献」は、漢訳では『本生経』として知られるが、主としてパーリ語聖典に収録される五四七の物語を指し、それぞれが「〇〇ジャータカ」と呼ばれ、内容はブッダが前世において菩薩であったときの善行を収録している。その前世の姿は、動物の時もあれば、天人、バラモン、商人などカーストからも離れ多様である。ジャータカの形式は、現在世物語、過去世物語、結びである。散文と韻文とで構成されており、本来韻文をジャータカと呼び、散文はその注解のための物語である。紀元前三世紀ごろ（アショーカ王のころ）、当時のインドで伝承されていた説話に仏教的内容が付加されて成立し

たものとされる。アショーカの時代、仏教は国教となり、一般人の目に触れるようになった。当時は、今我々が認識する仏像はまだなく、人々が「仏教」と認識したのは、仏塔などの建造物やその周辺にいる僧侶であったと思われる。本書の最大の特徴は、ジャータカとその彫刻の図像とを照合していることである。ジャータカが現在の形になったのは五世紀ごろと考えられており、ここで紹介される図像は、それ以前の二から三世紀ものがほとんどである。図像がジャータカに何らかの影響を与えた可能性も示唆される。著者は、僧侶の中でもバーナカ（説法師）という役職者が、一般人に仏教を語る際に、ジャータカを用いたと言う。イメージとしては仏教講談師のようなものだろうか。彼らはおそらく絵解きをしつつ、彼らの頭の中に保存されている必ずしも大乗仏教で説き継がれたものではないジャータカを語りつつ、すでに存在した大乗仏教の菩薩の「利他の精神」も語ったのかもしれない。そのような想像力を刺激してくれる一書である。　**（井上博文）**

（第三九一号　二〇二一年十二月）

『ねぇ、お坊さん教えてよ　死んだらどうなるの？』

岡崎秀麿・冨島信海 著

本願寺出版社　二〇二一年

仏教やお寺に関する素朴な疑問。でも、なかなかお坊さんには聞きづらい面がありますよね。そんな疑問・質問に浄土真宗本願寺派のお坊さんが丁寧に答えたのが本書。

「死後の世界はあるのか？」、「魂は残るのか？」、「死んでもまた、この世に生まれ変われるのか？」など、お坊さんが答えるからこそ意味がある質問をはじめ、計二十五の質問とその答えが掲載されている。中には、お坊さんとして答えにくいような質問もあると思うが、想定される場面ごとに答えを用意してくれている。

本書一冊あれば万事解決…と思いきや、著者は「本書が示した答えが不十分であることは間違いない…」と謙虚な姿勢を示している。しかし、本書が示す答えは、もちろん高水準に達しているだろうし、その内容は読み応えがある。それにも関わらず、著者の謙虚な言葉は何を伝えようとしているのだろうか。

著者は浄土真宗本願寺派総合研究所（以下、研究所）の二人の研究員。著者の二人は研究所では現代における葬送儀礼やお墓の課題について取り組んでおり、掲載された質問は業務で浮き彫りになった一般の方の素朴な悩みや疑問なども関係しているのだろう。

その意味で注目すべきは、「仏壇は買わなければならないのか」「お墓って何のためにあるのか」などの質問である。仏壇やお墓はお坊さんにとっては当たり前にあるものだが、現在の日本社会では人々の死生観が多様化し、それは仏壇やお墓のあり方にまで影響を及ぼしている。つまり仏壇やお墓があることが当たり前ではなくなっているのだ。そのような多様化した社会の中で、お坊さんが「常識」として考えてしまっている価値観を押しつけるのではなく、よりわかりやすいように、その「常識」を噛み砕いている。著者の謙虚な言葉は正解のない問題に挑むとともに、多様化した常識に対峙しようとしたことの表れなのだ。このことは、各設問の最後に付されているコラムの書き方からもわかる。このコラムはそれぞれの質問に関連した内容について、ふと疑問に思うことをやさしくかつ詳細に書かれている。本文に勝るとも劣らない秀逸なコーナーだ。

また多様化する社会だからこそ家族間でも多様な考えがあることが予想される。本書冒頭に「ご自身やご家族、ご親族の葬儀やお墓、仏事のことについて話し合う機会にしていただきたい」と書かれているように、センシティブな話こそ、しっかりと家族間で話し合い共有することの重要性も伝えたいのだろう。

本書と同時に『どうしてお葬式をするの?』も刊行されている。この本もお坊さんの常識だけで語ろうとはせず、一般の疑問にやさしく寄り添っている。こちらも合わせてご一読ください。

（野村淳爾）

（第三九二号　二〇二二年一月）

『般若心経』

『般若心経』、このお経の名前を耳にしたことがない人は、ほとんどいないと思います。なかには、法事などで読んだことがある人もいるかもしれません。

なぜこのお経はここまで有名なのでしょうか。それは、やはり手ごろな長さにあると思います。『般若心経』は２５０字くらいの短いお経です。他のお経に比べて圧倒的に短いゆえに、親しみやすい。これが、このお経が現在に至るまで愛されていることの要因でしょう。

しかし、このお経の意味を理解している人はどのくらいいるでしょうか。何やら小難しげな漢字が並んでいて、意味なんてさっぱり、というのが大方の実感でしょう。かく言う私も、確かに字面の解説くらいはできます。しかし、表向きの字面よりも踏み込んだ、奥深い意味合いを言葉にして伝えてみろ、と注文されると、正直なところ自信がありません。

ただ、日頃から考えていることの一端をここに書いてみたいと思います。私がよく思い起こすのは、このお経の「不増不減」という一句です。つまり、「増えない、減らない」。正確には「何ものも、実際のところは、増えもしないし、減りもしない」という意味です。

たとえば、人間が年老いていくことを考えてみましょう。誰しも一日、一日と年老いていっています。年を取るなんてまっぴらごめんだ、と思っている人もいるでしょうが、現実は残酷です。年を重ねるとは、年齢が「増えること」です。と同時に、若さが「減ること」でもあります。そして、両方を足し合わせた結果は差し引きゼロ、これが「不増不減」ではないかと思います。

若さが減れば、私たちは身体のあちこちに病気やら故障を抱えることになります。これは健康が「減ること」と言えます。と同時に、ああいう時はこう、こういう時はああすればいい、という具合に、老いとの付き合い方を学んでいきます。これは高齢者ならではの知恵が「増えること」です。ここでも結果は差し引きゼロ、つまり実質上「不増不減」と言えるのではないでしょうか。

たった四文字の句ですが、色々と考えていくと、実に味わい深いものです。

（安田章紀）

（第三八七号　二〇二一年五月）

『恵信尼消息』

今から七五〇年ほど前。電灯などない夜の闇は深く、月の明かりは今よりずっと輝きの色が濃かった頃のこと。越後（新潟県）から遠くはなれた京都の地へ、慈愛に満ちた手紙が送られます。差出人は親鸞聖人の妻、恵信尼さまです。宛名はお二人の末娘、覚信尼さまでした。そのお手紙を『恵信尼消息』とよんでいます。

親鸞聖人が息を引き取られたことを、京都で看取った覚信尼さまは、越後の地で暮らす母へ伝えます。娘の抱えた不安を感じ取られたのでしょう。その返信には、ありし日の親鸞聖人の姿が書き綴られていました。ここに、『恵信尼消息』がはじまります。親鸞聖人が法然聖人に出会われた頃の様子、ご自身がみた夢を親鸞聖人に伝えた時の話などいずれも、いとおしい娘に知らせんとする「あなたのお父さんは、このような方であった」との思いが、力強い言葉にのせて伝わってくるようです。また一方で、お手紙には、越後の地で過ごすご自身の姿が飾ることなく記されています。孫たちとの暮らしの中で、自分が母親になった気さえしていると語られ、飢饉の時には着物を売るほどに生活に困窮し、八十七歳のお手紙では、体は動くけれども、物忘れがひどくなり、身も心も衰えたなどと、人としての有り様を赤裸々に明かされているのです。その言葉の端々からは、日だまりのようなぬくもりとしなやかな強さをもった方であったように思われます。

そして、根底には、命の終わり、その行く先を心配する必要がない仏さまの教えに、ただ今出遇っていることを伝えようとする心が流れているように感じます。それは、親鸞聖人が明らかにされた仏教、老若男女問わず、泣いたり笑ったりする日常生活の中に歩むことができる仏さまの教えでした。『恵信尼消息』では、その教えとともに生きぬかれた一人の女性の姿をあらためて感じるのです。

人生をともにするパートナーとは、どのような存在でしょうか。様々な形があり、一律に語ることはできないでしょうが、喜びや悲しみを分け合い、憂いや惑いの中にも、親鸞聖人と恵信尼さまのように同じ

方向を向いている。もし、そのような方との出遇いであったならば、人生においてきっと大きな意味をもつことになるのではないでしょうか。

（塚本一真）

（第三九一号　二〇二一年十二月）

法のことば

念仏往生の義を
ふかくもかたくも申さん人は
つやつや本願の義をしらざる人と心得べし

（『和語灯録』諸人伝説の詞）

法然聖人の遺文や法語を収録した『和語灯録』には、「念仏往生の教えをあげつらい、難しくいう人は、本願の正しいいわれを知らない人である」と記されています。

なんでもかんでも頭で理解しようとし、「わかった」と合点して、知的理解を誇ってしまう。いつも注意しなくてはいけない大切なことです。「わかる」というのは、秩序を生む心の働きであり、自分の記憶などを土台として、その反応が形成される（山鳥重『「わかる」とはどういうことか』、ちくま新書）という指摘があります。あくまでも自分というフィルターをとおしてでしかないのです。

平等に救うという本願他力の念仏はどのような人にも届いているのであり、その主体は阿弥陀仏です。自分というフィルターをとおしてでは、決して「わからない」ものです。「わからない」と受け止めることでこそ、開かれてくる世界があるのです。

（中西俊英）

（第三九二号　二〇二二年一月）

シリーズ

澪標（みおつくし）

黒田義道

澪標とは、浅い海などで通行する船に水路をしらせる標識です。因みに大阪市の市章は、この澪標を図案化していることで有名です。芬陀利華では、宗教部長のコラムとして、そのときどきの思いが綴られています。

大学生時代、親鸞聖人の歩いた関東の地を、車で走り回った。かなり鈍ってはいるが、それでもなお、ある程度の土地勘が残っている。

関東平野は広い。その関東平野の北東に、北から突き出ている山が筑波山である。近江盆地で育った筆者は、見渡す限りの平野の中で、山が唯一の道しるべになるという経験を初めて持った。京都周辺で育った親鸞も、同様であったに違いない。

親鸞は広大で深いものを示す譬喩に海を好んで用いる。京都を追放され、流罪となった越後で見た海に心惹かれたからだと言われる。親鸞自身は何も語っていないが、その土地を訪れて初めて、「なるほど」と実感して理解できることもある。

ある人物や歴史的事件を知ろうとするとき、その人物や事件ゆかりの土地を繰り返し訪れることを強くお奨めしたい。書物や教室での学びとは異なる理解が身につくはずである。

現地を訪れるとき、ナビを使ってはならない（重要）。顔を上げて景色を見よう。ナビがない時代の人々の旅を想像しよう。迷子になることもまた、学びのうちである。

京女周辺は、京都における宗教的遺産の宝庫である。三十三間堂や清水寺はもちろん、有名無名の見所が数多くある。名宝の方から集まってくれる京都国立博物館まである。「いつでも行ける」と油断するなかれ。「いつでも行ける」は「いつも行かない」になりがちである。大学周辺を、歩け、歩け！

（第三八六号　二〇二一年四月）

親鸞聖人は承安三年（一一七三）四月一日の誕生と伝えられる。これを現在の暦に換算した五月二十一日に、聖人の誕生をお祝いする降誕会が行われている。

親鸞聖人の誕生年が承安三年であることは、聖人自身が記しているから確実である。しかしその誕生日となると、最も古い記録でも江戸時代（宝永三年・一七〇六）までしか遡ることができない。一般に誕生日は記録が残りにくい。つまり、その誕生日が本当に四月一日（五月二十一日）であったかどうかは、学術的には怪しいのである。

けれども「これは困った。本学でも降誕会を執り行っている。やめるか？」とはならない。親鸞聖人がいなかったならば、その教えに生き後世に伝えた人々（たとえば京女創立に尽力した三女性）もなく、その教えを建学の精神とする京都女子大学も存在しない。

降誕会は、親鸞聖人の誕生日を祝っているのではない。浄土真宗と

いう仏教を顕らかにした聖人が、この世に生まれてきたことそのものをお祝いしているのである。その行事が、仮に学術的に不確かであるとしても、聖人の誕生日と伝えられる日に行われることは、自然なことといえる。

親鸞聖人の教えは様々に説明することができる。中でも感謝に生きることの幸せを身をもって示したところに、浄土真宗に限らない意義がある。感謝に生きる人は孤独ではない。親鸞聖人はまさに「感謝できる。感動できる。」人であった。

（第三八七号　二〇二一年五月）

私たちの物事の見方というものは、幼い頃から無意識のうちに身についているものが少なくない。たとえば「裁判官」をイメージした時に、多くの人は男性を思い浮かべるのではないだろうか。このような心のフィルターは、差別にさえつながりかねない危うさを持つ。

一方、好ましい心のフィルターもある。二〇〇一年、アフガニスタンのバーミヤンにある石仏が、イスラムの過激派によって爆破された。この時の衝撃的な動画は、今もウェブ上で容易に視ることができる。この時、世界の仏教徒から、「残念だ」という声は無数に挙がった。しかし「奴らは許せない、殺せ」という声は出なかった。

仏教は、すべてのものはとどまることなく変化し続けている、という現実を直視する。諸行無常の教えである。仏像であれ文化財であれ、いずれ必ず、その存在が失われることを、仏教徒は承知しているのである。

日本でもバーミヤンの石仏破壊を惜しむ声は挙がった。しかし「奴らを殺せ」という声は出なかった。これは、日本文化の基底の一つに、確かに仏教があることを示す例であろう。つまり日本に暮らす多くの人々の間に仏教的なフィルターが共有されているのである。

良きにつけ悪しきにつけ自分の持つ無意識のフィルターに自分で気づくことは難しい。仏教の学びは、自己を学ぶことだといえる。ことに自己中心のフィルターを学ぶことに、仏教を学ぶ重要な意義がある。

（第三八八号　二〇二一年六月）

「昔の真宗・仏教の学匠たちは、仏典を丸暗記していた。そればかりか、それがどの聖典全集の何ページ何行目にあるかまで覚えておられた」。間違いなく事実である。

真宗学・仏教学の研究史は長い。高名な学匠方と比較するのはおこがましいが、私には不可能な芸当である。今日では主要な仏典は、暗記しなくても容易に検索ができるようになった。

名著とされる梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波新書、一九六九年）を読む機会があった。五十年以上前の書物であるから、そこで紹介されるツール（たとえば京大式カード）や技法は古く見える。しかし、ツールをＰＣで扱うようになっただけで、本書に通底する、情報に向き合う技術、創造的発想を生む着実な技法は、現在でも少なからず有益であろう。

情報の検索は圧倒的に便利になった。図書館の蔵書も新聞記事も仏典も、あっという間に検索ができる。これは捨てがたい便利さである。

仏典は暗記しようとして暗記できる分量ではない。昔の学匠たちは、繰り返し繰り返し仏典を読み込み、議論することを通して、意図せず暗記されたのであろう。

現代は多量の情報処理を私たちに求める。その中で私たちは一つの事柄に繰り返し丁寧に向き合う姿勢を忘れていないか。

仏典の検索を行うたびに思う。「暗記していれば検索作業自体が不要なのに」。「本当に仏典にきちんと向き合えているのだろうか」。

（第三八九号　二〇二一年九月）

釈尊はラージャガハから故郷に向かう旅の途中で入滅している。その旅に出る直前、ヴァッジ族征服を計画したマガダ国王アジャータサットゥから、その政策について諮問を受けている。釈尊は七つの項目を挙げ、ヴァッジ族がそれらを守っているうちは、繁栄し続けるであろうと説いた。

その内容には大きく三つの特徴があるといわれる。すなわち、協和の精神、経験の尊重、宗教的寛容である。これらは、直接は王に対する助言であり、血気に逸（はや）る王に冷静に考えさせ、征服を思い留まらせる内容である。

しかし、その内容はいずれも現代的意義がある。このうち、協和の精神とまとめることができる内容は、会議に多くの人々が参加し、互いに協力し合っていることである。一種の民主的社会である。これらは仏教教団でも、その繁栄に必要な事柄として大切にされた。

ところで、本紙発行の頃に衆議院議員の総選挙が見込まれる。学生

の皆さんには、協和の精神で、ぜひ投票を行っていただきたい。日本や世界が繁栄できるように、ぜひ必要なことである。

近年の大きな選挙では、自分と各政党・候補との考え方の異同を示す、ボート・マッチ・システムが提供され、投票先の選択に大いに参考になる。

大学人にとって、選挙は自らの学びが社会の中でどんな意義があることなのか、考える機会でもある。研究・学びの成果を投票の形で社会に還元したいと思う。

（第三九〇号　二〇二一年十月）

「いのちの尊さを伝えるためには、どうすればいいですか」。学生さんから、時折いただく質問である。読者の皆さんは、どのようにお答えになるだろうか。

容易に答えることができない質問である。

万全な方法があるなら、既に広く実践されているはずであるが、そうではない。また「いのちは尊い」という価値観を不用意に強調することは、様々な経緯や関わりの中で、自他のいのちを尊いものと考えることが出来ない方を、「自分はだめな人間だ」とさらに追い詰めることになりかねない。

「いのちは尊い」という命題に、異論があるわけではないし、むしろそれを大切にしたい。しかし、それが、疑うこと自体が許されない命題となってしまっているところに、実に大きな落とし穴がある。結論だけが独り歩きして、「なぜいのちは尊いのか」、この場合の「いのち」

とは何か、それを「尊い」ものとして生きるとはどうすることか。たとえばこのような問いが忘れ去られてはいないだろうか。こうした問いに向き合うことが必要である。

「いのちは尊い」ということは、理屈が納得できれば、「わかった」と言えるものでもない。いのちの尊さとは、そのような感性が磨かれることによって、一人一人に明らかになる事柄である。

仏教は人間を深く見つめている教えである。「いのちは尊い」と受けとめることができる感性を、仏教を手がかりに磨き続けたい。（義）

（第三九一号　二〇二一年十二月）

私たちは、様々な形で、他のいのちとともにあり、あるいは他のいのちを奪いながら生きて行かざるを得ない。身近には食べ物としていただくこともあるし、地球規模で言えば、人間の諸活動の結果、たとえば気候変動がもたらされ、奪った自覚さえないままに多くのいのちを奪っている。

そのような私たちが、美辞麗句を並べて「いのちを大切に」等と言っても、それは上滑りした綺麗事になりかねない。

ところで、浄土真宗の礼拝行事は、私たち自身に向けられた阿弥陀仏の心に触れることが根本的な目的である。私たちの思いを仏に聞かせる行事ではない（少なくともそれは本義ではない）。大切なペットの死は悼むことができても、食卓に並ぶ肉や魚のいのちに心を向ける機会は少ない。

最近、ペットの葬儀について尋ねられた。身近な動物の死を通して、

阿弥陀仏の心、すなわち煩悩に振り回される私たちの姿を見抜く確かな慈悲を聞くならば、大いに意味のある葬儀である。葬儀を含む浄土真宗の仏事は、私たち自身を目当てとして行われるのである。

阿弥陀仏の名前は、限りないはたらきを持つ仏、という意である。そのはたらきは、人知を超越し、私たちにとっては不可思議というよりほかない。先立ったペットたちを通して、阿弥陀仏のはたらきに触れたなら、そのペットたちは、私たちの心を仏教へと導いてくれた、宗教的先生であると受けとめることができるのである。

（第三九二号　二〇二二年一月）

令和三年度　宗教部行事一覧

宗教部がこの一年間に実施した主な宗教行事は次のとおりです。

4月6日(火)　新入生本願寺参拝
4月8日(木)　花まつり
5月21日(金)　親鸞聖人降誕会
　春の見学会
　※新型コロナウイルス感染防止の観点により実施取り止め。
6月23日(水)　本願寺書院・飛雲閣拝観（前期）
　※新型コロナウイルス感染防止の観点により実施取り止め。
8月下旬～　宗教教育部夏期巡回（福岡県）
　※新型コロナウイルス感染防止の観点により実施取り止め。
9月上旬　宗教教育海外研修会（中国）
9月上旬
　※新型コロナウイルス感染防止の観点により実施取り止め。
10月27日(水)　本願寺書院・飛雲閣拝観（後期）
10月30日(土)　秋の見学会（金剛輪寺・西明寺・百済寺・近江水郷めぐり）
11月13日(土)　学園報恩講
11月17日(水)　卒業回生の合同礼拝
　記念講演「コロナ禍から学ぶ人生の解決とは」
　みやざきホスピタル副院長　宮崎　幸枝 氏
11月27日(土)　日帰り研修会「比叡山延暦寺を訪ねて」
12月11日(土)　仏前成人式
　式典（キャンドルサービス）
　記念講演「あなたが、あなたのままで輝く
　～仏前成人式によせて～」
　真宗佛光寺派長谷山北ノ院　大行寺住職　英月 氏
12月15日(水)　仏教講座「みのりの時間」
2月中旬　宗教教育国内研修会「親鸞聖人ご旧跡巡拝（関東聖跡巡拝）」
　※新型コロナウイルス感染防止の観点により実施取り止め。
3月14日(月)　卒業生本願寺参拝
　帰敬式・法名伝達

編集後記

□ ご入学おめでとうございます。

□ 本学は、親鸞聖人の体された仏教精神を建学の精神としています。この電子版冊子『芬陀利華』は、その活動の一環として、教職員の先生方の玉稿を掲載した広報紙 新聞「芬陀利華」を再編集したものです。

□ 「芬陀利華」（ふんだりけ）とは、泥中に咲き、清らかな芳香を漂わせる〝白蓮華〟（びゃくれんげ）のことです。仏教では、仏さまの教えに出遭い聞信して生きる人を、泥水（煩悩にまみれた世間）の中にあって、真っ白な美しい花を開花する蓮の花にたとえて、褒め讃えています。

□ 令和四年の春を迎えました。皆さんは大学生活において、これまで経験したことのない新たな出遭いがあるでしょう。貴重な出遭いを縁として、感受性豊かな青春時代に、わが身をかえりみることの大切さを説く仏教精神を学ぶことは、非常に意義あることといえます。新入生の皆さん、一大学人として各自心機一転、各々の掲げた目標を見失うことなく、自己実現の道を邁進して下さい。

□ 「芬陀利華」を読まれて、何か感じることがありましたら、是非、宗教教育センターを訪ねて下さい。

□ 宗教教育センターでは学生の皆さんに「建学の精神」を体得していただきたいという願いから、様々な行事や活動を行っています。皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

宗教教育センター

芬陀利華　第五十一集　令和四年三月発行　（非売品）
京都市東山区今熊野北日吉町三五
ＴＥＬ　五三一―七〇七四
発行所　京都女子大学宗教部
編集責任　宗教部宗教教育センター